
厄神様はかく過ごせり

ガラスの靴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

厄神様はかく過ぎせり

【Zコード】

N1230D

【作者名】

ガラスの靴

【あらすじ】

神を信じない高校生のもとに現れたのは神様修行中の幽霊。そんな人々の日常をのんびりと見ていく連作短編です。連載小説「厄神様はかく語りき」を読むと11倍くらいわかりやすくなると思います。

「厄神様はかく語りせつ」（前書き）

都合上連載小説へと変更させていただきました。
短編の方を読んで頂いた皆様、まことに申し訳ありません。内容は
変わりません。

また、連載小説「厄神様はかく語りつき」を読んでいないことわざぱり
だと思います。

そんなものに興味はない、といつ方は他の小説を探しになっていた
だとか或いは勇敢にもこのままお進み下さい。

【厄神様はかく週】せつ

直樹さん、おはようございます。小夜です。

直樹さんには厄病神と不名誉な呼び方で呼ばれ続けていますが、ちゃんと名前があるんですよ？

本当はわたし自身の1日をお伝えしなければならないのですが、わたしは一部の人としか会話ができない上にほとんど直樹さんと同じ生活リズムをしていますので、今回は代わりに直樹さんの1日をレポートしていくたいと思ひます。

「直樹さん、朝ですよ」

「……」

直樹さんは今大きな家で一人暮らしをしています。両親の方は共に海外出張らしく、ほとんど戻つてこられないそうです。

そのため直樹さんは目覚まし時計で起きることに慣れてしまったようで、わたしが起こそうとしてもまったく起きてくれません。

以前に目覚ましを止めてから起こしたときは結局遅刻してしまい、怒られてしまいました。

それから保険として目覚まし時計のアラームをつけたままで起きしているのですが、そうすると余計目覚まし時計が鳴るまで起きてもらえなくなってしまいました。

ジリリリリリリリリ！！

「……ん、朝か。……厄病神、着がえる。出でけ」

「……」

……今日も失敗してしまいました。いつか目覚まし時計が鳴る前に起こせるよう頑張ります。

……それでも、あの言い方はちょっとひどいと思ひます……。

朝食は直樹さんと一緒に作ります。

確かに最初に作ったときは少し失敗してしまいましたが、今では目玉焼きだつてきちんと焼けます。それなのにトーストを焼くこととお皿に盛り付けることしか許してくれません。

わたしはご飯を食べることができないので、作るのは直樹さんの分だけです。

直樹さんはだいぶ小食で、トーストと目玉焼き、それにサラダを少し食べるだけでお腹一杯のようです。

それでも朝からしつかりと食べるから健康だ、と本人は言っています。

その後は、直樹さんの通う高校へ行きます。

直樹さんの家からは歩いて20分ほどの距離で、遅刻しない限りは随分のんびりと歩いていきます。

「よう狭山！ 今日は早いんだな！」

「最初からいたかのような登場の仕方をするな。遅刻寸前の癖に」直樹さんのご友人の桜乃さんが登校してきました。直樹さんとは対照的にいつも遅刻の境界線にいるようです。

「はい、藤阪さん、遅刻ですね」

「分かつてるわよ煩いわね！！ 少しは大目に見なさいよーー！」

そして今日も朝礼が始まつてから教室に現れたのは藤阪さん。本当に遅刻の回数が多いです。

わたしはこのお2人には姿が見えません。そのためわたしと直樹さんが話しているところを見られると直樹さんが変人に見られてしますので、できるだけ話しかけないようにしています。やっぱり直樹さんに迷惑はかけないようしたいです。

「狭山、それではな」

「ああ。お前も部活頑張れよ」

授業が終わり、クラスの人たちがそれぞれ家路についたり部活に行つたりします。凛さんは剣道部に所属していて、とてもお強いようです。

「凛さん、頑張って下さいね！」

「ああ、ありがとう」

そして凛さんはわたしを見ることができる数少ない人たちの一人なのです。そのため少し危ない目に遭つてしましましたが、直樹さんを心配しての行動だったようで、とてもいい人でした。そして直樹さんは吹奏楽部へと向かいいます。

「辻…………お前は何度言えば…………!?」

「きや…………みんな逃げろ…………！」

直樹さんは今日も辻さんの悪戯に怒つて追いかけっこをしています。実は直樹さん自身楽しんでいるのかもしれません。本当に迷惑なことにはしつかりとした拒絶の意思を表す人ですから。

「狭山くん！ 貴方は本当に最高学年の自覚があるの！？」

「う……松崎…………」

そうしていつものように部長さんに怒られていきました。非常にばつの悪そうな顔をしています。やっぱり本人も楽しんでいたのでしょうか。

「…………何を笑っている」

…………睨まれてしましました。どうやら気付かぬうちに顔が笑っていたようです。

「やあやあ直樹氏！ 今日も遊びに來たよー」

「帰れ」

「……では失礼します」

「なんでお前が反応するんだ！ 帰れといわれて本当に帰る部員がどこにいるー？」

そして神楽さんと舞さんとも楽しそうにお話をしています。神楽さんはわたしと同じように幽靈から神様になつた人で、今ではとても偉い人のようです。まつたく知りませんでした。

そして神楽さんが神様になる時に幸せを分けてもらつていたのが舞さんだそうです。

「お2人も凛さんと同じくわたしの存在に気付いてもらえる人で、わたしも神楽さんには色々なことを教えてもらつています。

……できるだけわがままを言えればいいそうなのですが、あまり直樹さんに迷惑をかけることはできないので難しそうです。

「……お前が来てから急に毎日疲れるようになつたな」

「直樹さんは皆さんにとっても好かれているみたいですね」

「気持ちの悪いことを言つくな」

直樹さんは否定したいのですが、皆さんと話しているときのお顔はとても楽しそうです。幸せを分けていただくのが勿体無いくらいです。

「ドン…

チャリチャリ——ン！——

「…………」

……とにかく、どうやら直樹さんがわたしのことを「厄病神」と呼ぶのも仕方ないことだと思つてしまつほど直樹さんには不運が降り注ぐようです。スーパーで夜ご飯の買い物を済ませようとしました時、他の人にぶつかって財布の中身を床にちりばめてしましました。

「直樹さん、大丈夫ですか？」

「……厄病神、たまには仕事を休んだらどうだ？」

ひどいです。わたしは直樹さんに進んで厄介事を呼び込んだりはしません。時々はやつちやうこともありますが、それでもいつもは願つてもいないうに直樹さんが困るようなことが起きてしまつのです。

「おこ、俺は寝るだ

夜、飯を食べ終え、お風呂に入つた直樹さんは高校生にしては済めの寝巻き姿でわたしに報告をしてきました。

「はい。おやすみなさい」

「寝るなら電気は消せよ

直樹さんはそう言つと寝室へ入つてきました。
わたしはこれからお風呂に入るのです。

直樹さんは自分のことを幸せとは遠いものだと想つてゐるみたいですが、全然そんな事はありません。

自分の周りにある幸せに気付くことはとても難しことですが、きっとだれでも出来ることだと思います。

直樹さんが少しでも早くそのことに気が付けますみつ。わたしの一歩はこうして歩いていくのです。

厄神様はかく過けせり（後書き）

ところがでリーユーアルオープンです。

……あの、本当にすいません。見捨てないで下さい。

これは「かく語りき」の主人公以外の登場人物がどのような日常を

送っているのかという補完的な小説となつております。

こちらは毎週更新で行きます。遅いですか。遅いですね。

次回は気分屋様のお話になる予定です。

気分屋様はかく過いせつ（前書き）

頑張つて週2でいく」とにしました。
すぐに挫折するかも知れません。
今回は藤阪のお話です。

気分屋様はかく過ぐせつ

『……………』

「んん……？」

朝7時を少し過ぎた時間。枕元に置いてあるあたしの携帯電話から着信アラームが鳴り響く。

「煩いわね……」

布団に入ったまま携帯を手繰り寄せ、確認する。メールだった。
『朝だぞ。遅刻するなよ』

差出人は、あいつ。あたしでも何だかよく分からぬ内に結ばれた約束だけど、何のかんのいつて結局毎日送ってくれている。

「…………眠い」

しかし所詮は電波で送られてくる単なるディスプレイ。あたしの睡魔はあっさりとそれを撃退し、一度寝を決めこんだ。

「…………いー…………むよー」

コンコン。

部屋のドアをノックする音が聞こえる。

あたしはイサヨなんて名前じゃない。きっと他の誰かだろう。

「…………葵ー、朝よー」

……やっぱりあたしのことじご。それならもうと早く言つて欲しかった。

「…………つて！」

ガバッ！

ベッドから跳ね起きる。先程放り投げた携帯を引っ付かんで時刻を確認。

8時17分。

「…………なんでもっと早く起いてくれないのよー！？

「だつて葵、何度呼んでも起きないんだもの
起こす努力をしなさああい！！」

あたしの学校は8時30分から朝のHRが始まる。といつても教師どもが教室に来るのは大体その2～3分後だ。そしてあたしの家から学校までは走って10分。支度を最速で済ませるのに5分くらいかかるので、なんとか間に合つ時間なのだ。

だが。

「はい、藤阪さん、遅刻です」

「なんであんたはこんな時間からいるのよ！？」他の連中見習つて予鈴鳴つてから教員室出なさいよね！？」

「他の方はベテランですか。私は新参者なのでこうでもしないと追い付けないんですよ」

何を言つか。20年前から教壇の上に立つていたのは知つてゐるだぞ。

「お前、俺がメール送つても結局遅刻ばっかりじゃないか
煩いわね！ 一度寝しちやつたんだからじょうがないじゃない！」

「威張るな」

「いやー、朝から元気だねえー」

ふらりと現れたのは響。どういう意味よ。

「いやいや、いいんじゃないの？ じつこのも」

「どういう意味だ」

「別に意味なんてなくてもいいだろ」

「いや、よくないからな」

あたしの目の前で楽しそうに馬鹿な話をする2人。じつしていると随分前から知り合いだつたみたいだけど、実は響はあたしとの付き合いの方が長い。あたしとは小学校から一緒に直樹とは高校になって初めて出会つている。

「おい藤阪、聞いてるのか？」

「 聞いてるわよ馬鹿」

「 酷くね？」

何やら響があたしに話しかけていたみたいだけど無視。どうせろくなことではない。

「 やつぱりカツ丼は最高だよな！」

あたしたち3人の昼休みは基本的に学食だ。響は毎日飽きずにカツ丼しか頼まない。体に悪いわよ。

「 放つとけ。どうせ蛋白質以外の栄養素は摂取したところでも活用されないだろ」

それもそうね。

「 お前ら、何かひどくねえ？」

「 気のせいだ」

「 気のせいよ」

「 泣いていいっすか？」

放課後。部活の時間だ。

「 藤阪、部活だぞ」

直樹が呼びに来る。来るのだけれど、体が動かない。だから勝手に言つてきて。

「 殴るぞ」

わかつたわよ。行けばいいんでしょ。

「 貴方たちも、いい加減にして欲しいわね

部活に来てしょっぱなから不愉快な顔に会つてしまつた。

「 いつもいつも煩いわね。10分くらい遅れたからって何か重大な

損失もあるわけ？ 株取引じゃあるまいし

「 貴方たちも、いい加減にして欲しいわね

「そうね。その10分貴女たちがいないのを後輩が見てビックリ感じるかも分からぬ人には難し過ぎたかしら」

「あー……あれだ、確かに遅れたことは遅れたが、その分今からの練習で取り戻すんだ。な？」

直樹がかなり苦しい取り繕いをする。

「ふう……いい加減、最高学年としての自覚を持つて欲しいわね」馬鹿馬鹿しいとしか思えない捨て台詞を残して静流は自分の練習に戻つていった。

「ほんとに腹が立つわねあの女」

昔からそうなのだ。幼稚園時代に仲良く遊んでいた自分を殴りに行きたい。腐れ縁にも程がある。

「まあ、松崎も悪気があつて言つてるわけじゃないだろ」

こいつは人の悪口に乗るということを知らない。誰の悪口が出てもそれをフォローするのだ。

そこが良いところでもあるのだけれど、いつもときには苛々する。

「……あんた、随分静流に甘くない？」

「……そうか？ そうでもないだろ」

最初の沈黙はなんなんだ。

「ですよねー。センパイは部長相手には全くもつてへタレです」

「……辻。その甚だ不名誉な台詞を俺の鉄拳が飛ぶ前に修正しろ」横からひょっこり満月が顔を出す。話が分かるわね。

「そうですね。部長だけじゃなくて同じクラスの碧海さんなんかにも優しく接してますねー」

「……あんた、それだけ聞くとかなり最悪な性格に見えるわね」

「煩い。不愉快な誤解に過ぎん」

「……でも確かに静流にはともかく碧海には優しい気がする。中学からの付き合いらしいし……」

「私には乱暴ですよねー。ひょっとして好きな子はいじめたくなるタイプですか？」

「なんだ？ それは宣戦布告と見なしていいのか？」

……だがむしろ一番危険なのはこの後輩かもしねない。勘だが。やあやあ直樹氏！ 今日も女性に囲まれて幸せそつだね！」

「……プレイボーイですか」

「これが幸せそうに見えるなら今すぐ眼科に行け。人を不名誉な言葉で形容するな。帰れと言いたいが市原は部員だからギリギリ堪えて神楽、お前は今すぐ立ち去れ」

「はっはっは！ 直樹氏は好きな子には意地悪をするタイプなんだううー？ 僕ならいつでも大歓迎だよー？」

「殺すぞ」

……そっち方面ってことは……ないわよね？ ……たぶん。

「お姉ちゃん」

「すみれ、帰るわよ

「はーい」

部活が終わって家に帰る。妹のすみれも一緒だ。よせと言ったのに同じ高校に来て同じ部活に入ったのが1年前。それから部活のある日は一緒に帰るようになつた。

「ただいまー！」

「ただいま」「ただいま」

上がすみれ、下が私だ。私はそんな気持ち悪いテンションで挨拶したりはしない。

「お帰りなさい」

「お帰り」

リビングには母ちゃんと父さんがいる。当たり前の光景だけど、家

に帰つても誰もいない人だつていいのだ。それを思つと邪険にすることなんて出来ない。

「葵、狭山君とはどうなの？」

「何い！？ やややっぱりこの前夕飯に呼んだのはそれこいつだとつたのかあああ！？」

「お姉ちゃんねー、今日も狭山先輩と一緒に部活来てたよー」

「煩い！.. 食事は黙つて食べなさい！..」

.....いやまあ、時にはあるけれども。

「お休みなさい」

「はい、お休みなさい」

「お休み」

11時過ぎ。お風呂に入つて寝る』ことにある。ちなみにすみれは9時頃には眠つてしまひ。お子様め。

あたしの『田舎』について過去世でこぐ。普通の高校生もきっとこんなもんだらう。

やつ、非日常なんてありえないのだ。今日も世界は平和である。

氣分屋様はかく過いせつ（後書き）

ところへと氣分屋様のお話でした。

妹は藤崎すみれ。高2で辻さんと友達です。

もう一人高2でこの2人とトリオを組んでいる人がいるのですが、
そのうち出てくるでしょ。つ。

一応彼女は自分の気持ちになんとななく気付いてあります。

気付いた上で今の関係を望んでいる、といったところでしょうか。

次回は聴衆役のお話になると 思います。

聴衆役はかく過りせつ（前書き）

今日は聴衆役のお話です。
要するに桜乃のお話です。

聴衆役はかく過いせつ

オツス、オラ響！

今日は俺のヴォールに覆われた私生活をほんの少しだけ見せてやるぜー！

朝になると、綺麗な姉さんが優しく俺を起こして

「起きらつつてんだよクソガキがあーー！」

「さあああああああーー！」

来るといいな、ほんと。

「うう……脇腹が痛い……」

「軟弱な野郎だな。軽く蹴つただけじゃねえか

嘘つけ。殺氣こもってただろ。

「」の若くしてドメステイックバイオレンスの親玉みたいなのは俺の姉貴、桜乃琴音さくらのことねという。何が琴音だ、名前の響きと性格のギャップが詐欺レベルに達している癖に。

「フゴア！？」

「テメエ、今ムカつく考えしてただろ」

「なんで考えただけで踵落とし喰らわなくちゃいけないんだよーー！」

「あーあーーー！」ちやーちやーつるせーなー

「真面目に聞けよオイーー！」

「無駄だつての」

「あん？」

横で黙々と朝食をとっていた拓斗たくとが達觀とも諦めともとれる溜息をついた。

「ん~？ 何が無駄だつて？ 言つてみ？」

姉貴が拓斗の両頬を引っ張りながら尋ねる。おーおー、伸びる伸びる。

「ひやひやひや、ひえ～ひやんひひょんひやひょひょひつひえひよ
ひゅひやひやつひゅ～ひよ～！」

そこまで言い切ったのは立派だが弟よ、何を言つて居るのかわからんぞ。

「日本語話せ」

「あひやああああ～～～」

案の定姉貴は引っ張っていた頬をそのまま両サイドに伸ばしきつた。指で掴めなくなつて頬は解放されるのだが、その瞬間の激痛は経験者にしか分からない。

さて、クソガキ2人のメシも終わつたし、千歌^{ちか}を起^{おこ}しにいくか

「まて姉貴」

「ああん？」

「まだレンジで温めた冷凍^{れいとう}飯と梅干ししか出てないんだけど」

「それで全部だ。千歌ー！ 朝だぞー！」

行つちまいやがつたあのクソ姉貴。白飯と梅干しなんて健康的にも程があるだろ。

「兄さん、だから姉さんにそなことこつたつて無駄だつづーの」
諦めるなマイブランザー。この不平等社会を覆せるのはお前の手にかかるつているんだぞ。

「拓斗お兄ちゃん、響お兄ちゃん、おはよーー！」

ああ、おはよう。

俺の家族は他の家と比べてもこの少子化の時代にしては子供が多いらしい。上から姉貴、オレ、拓斗、そして千歌だ。

「今日も可愛いなあ千歌は。頼むからそのままのお前でいてくれよ

「……？ はーい！」

拓斗、妹を愛るのは結構だが本音が後半にだだ漏れしてゐるぞ。

「……それは誰を想定して言つてんだ？」

「げえ！？ ね、姉さん！…」

「さあ千歌、今朝^{あさ}はんを用意するからな。しつかり食べるんだぞ

？」

そう言いながら炊飯器から炊きたての「」飯をよそい、田玉焼き、焼き鮭、味噌汁を千歌の前に並べる。……もはや何も言つまい。

「……拓斗お兄ちゃんと響お兄ちゃんはいいの一？」

「ああ、あいつらはもう食べ終わつたんだ。食いしん坊だからな」「そりなんだー！」

言つに事欠いてこの女は。

「おはよーう」

やがてお袋が現れる。

「おう、おはよ」

「おはようお母さん……」

「…………」

ツカツカツカ。

バツコーーーン！！

「「あだー！ 何すんだよ！？」」

「朝の挨拶も出来ない奴に文句言われたくないわね
それを言うならきなりスリッパで息子2人を殴りつける奴に正論言われたくないわ。

「おつと、もうこんな時間。「」アンタ寝坊なんかで遅刻したら一度と寝れないように軒下に吊すわよーーーー！」

「ヒイイイイイイー！！」

寝室から悲鳴。

……まあ、なんだ。要するにアレがオレの両親だ。この女尊男卑の「」ユーニティを作り出した元凶とも言える。どちらも音大をトップレベルで卒業したとは思えない。

オレと拓斗はこの不平等社会を打破すべく日夜努力しているのだが、お袋と姉貴という最初にして最大の関門を未だ突破できず、結果消極的改善としてせめて千歌を今の性格のまま育て上げよう五ヵ年計画に走っている。分かつてくれ。

「ところでテメエら、学校はいいのか？」

「え」

時計を見る。

……8時20分。

「……しまつたああああ……」「

「おい拓斗！……お前オレの代わりに3-DのHARU出い……」「はあ！？ なんでだよ！？」

「なんであつてお前、代返してもらつたために決まつてるだろ……」「

「ふざけんな！ 僕が遅刻になるだろ……」

互いに全力疾走しながら怒鳴り合つ。取り敢えず学校に着けばあとは寝てればいいので体力配分は問題ない。

「ヤバいよ兄さん！ あと3分……」

「うおおおおおお……」「

「あ、間に合つた……」「

「お前、馬鹿だな」

「馬鹿ね」

ギリギリ教室に滑り込み、机で息を整えていると狭山と葵の呆れたよつた声が耳に届いた。お前らもあの家で生活してみる。

「おーい、朝だぞ」

「……はつ」

顔を上げると狭山の顔が目の前に。

「もう昼休みなんだけど」

「お前、学校に向しに来てんの？」

「煩い。寝にきてんだ。悪いか。

「悪いわね」

と藤阪。お前だつて授業中は寝てんじやん。

「休み時間は起きてるわよ。あなたみたいに無駄に過ぎじてゐるわけじゃないの」

「いや、お前ら、根本的に間違つてるからね」

分かつてゐるわこの優等生。

「ん？ なんだ？」

「あん？ なに？」

「あ、いや……」

視線の先には……碧海の姿。馬鹿。

「…………」

あああああ見ろ。藤阪が田に見えて不機嫌に。それとも気付けこの鈍感男。

「悪い、ちょっと先行つてくれ」

あの超絶馬鹿はあるつことか碧海の元へ駆け出しあがつた。

「……そうね。先に行きましょう」

あの、葵さん、すんげえ怖いんだけど。

「何のことかしら？」

笑顔で迫るな。トラウマものだぞ。

碧海が拒否じようとするもそのまま押し付ける。お、帰ってきた。

「お帰り。どうだつた」

藤阪、藤阪、まだ怒りのオーラ出でるから。

「あ、ああ。財布を忘れたみたいだったから、昼食くへりしちゃんと食べつて金を……」

「ふーん……」

「……ど、どうしたんだよ……？」

「別に」

「…………？」

絶対こいつは藤阪の不機嫌の理由に気が付いてない。これに気が付いてこらならとつてくつこつてゐる。

「んぬ~」

食べるのほむちゅんカツ丼。やはりこのカツ丼は美味しい。

「こんなもんばつかでよく体もつな……」

「ほら、あれよ、脳味噌筋肉?」

「オレのカツ丼を馬鹿にするなあーーー。」

授業が終わり、部活の時間。

「桜乃、お前も来るのか?」

「おうし、じっくり聴いてやるわ」

「だとよ、藤阪。行くぞ」

「嫌」

「おい」

「辻ちゃん上手くなつたねえー。もう狭山超えてるんじゃない?」「いやいや、センパイはこんなもんぢやないですよ」「あいつももう少し自信持つて吹けばいいのに、勿体無いよなあー」「私は今のセンパイの音の方が好きですよー。なんだか優しい感じがして」

「そういうもんかねえ……?」

「はい。そういうもんなんです」

辻ちゃんは今日も元気だ。狭山のいる前では絶対ことなこと言わないんだよな。狙つてやつてるのか?

「桜乃くん、部活は遊びに行くところではないんだけど」

今日も鬼部長のお出ましだ。姑гонテストなんでものがあったら最年少で殿堂入りを果たしそうだ。部活は遊びに来るところだらう。「兄さんも部活に入ればいいのに

拓斗がティンパニを調律しながらぼやく。馬鹿、しつこいのは外から見た方が面白いんだよ。

「さあ直樹氏！ 横山のために思つ存分演奏してくれたまえ！」

一 気持ち悪いわ！」

花溪記ノリハニシテ

卷之三

帰る途中で神楽を見かけた。今日も意味のわからないことを言つてゐるようだ。そういえばあの従者みたいな女の子はこの前正式に部活に入つたらしい。

精々面白い劇を見せてくれ。

たたしま

「何こんな半端な時間に帰ってきてやかんた俺様と千鶴のアレアタ
イムを返せクソガキイイイー！」

卷之三

立二
三
四

聴衆役はかく週りせつ（後書き）

ところが、ついで聴衆役の一回でした。毎日更新でないと全くアクセス数が伸びない所にこの作品のポテンシャルの低さを感じますね。

桜乃は実はかなり書きにくいキャラクターです。馬鹿の中に隠れた聰明さ、とでも言つのでしょうか、それを表現するのにまだまだ力不足なようです。

彼の兄弟姉妹は本編でもその内出でぐると思います。ちなみに弟の拓斗は辻やすみれと同じ学年です。

次回は恐らく退魔士様のお話です。

退魔士様はかく過いせつ（前書き）

日常ほのぼの、第4弾です。
でも今回あんまりほのぼのしてません。
お気をつけ下さい。

退魔士様はかく過ぐせり

私の一日は早くから始まる。

まず早朝。太陽が昇らない内に起き、日課の鍛錬を済ませる。この時に行うのは素振りなどの基礎的なものが中心となる。

「643……644……」

このようなものは無心で行うのが大事だ。ただただ決められた通りに体を動かす。

それを2時間程続けると朝食に丁度良い頃合いだ。母上が作ってくれた料理はいつも美味しい。

「凛、学校はどうだ？」

普段通りです。小夜も特に周りの人間に影響を与えている様子はありません

「そうか……」

「凛、狭山くんとはうまくいってる?..」

「ぶつ！？」

吹いた。しまった、汚い。

「な、な、何を言っているのですか母上!? わた私は別にそのようなことは……!？」

「なんだとお！？ 凜、まままさかお前あの小僧と付き合つているのか！？」

「ち、父上！ 変なことを言わないで下さい…」

「み、認めん！ 認めんぞ！ あんな軟弱な小僧……」

「あなた、凛が選ぶ人なら大丈夫ですよ。力だけが全てではありません」

「し、しかもしもの時にしっかり守る事が出来る漢でなければ…

…」

「あなた？」

「う、うむ……」

「ち、父上も母上も、余計な事を言わないで下さい。別に私と狭山はそのような関係ではありません」

「あらあら、照れちゃって」

「むむむ……」

「だ、だから……」

はあ。朝から疲れた。

朝食を食べ終えた後は学校へ向かう。

学校までは若干遠いがせいぜい20分程度だ。歩いていけばすぐ

に着く。

教室の中は今日も同級生がそれぞれの会話を楽しんでいる。といつてもわざわざ話しかけて来る者もいないので私にとつては静かな朝だ。

ガラッ。

「ふう。最近は元通りの時間に来れるようになつてきたな」

「そうですね。あまり変なことも起こらなくなりましたし」

始業ベルが鳴るより15分程早く狭山が登校してきた。小夜も毎日ついてきている。

「…………」

無意識に狭山を目で追つてしまつ。すると小夜が気付いて手を振つてくれた。

「…………ふふ…………」

いい子だ、と思つ。

私と話をする人は本当に少ない。そんな中で休み時間などにちよくちょく話しかけてくれるのは性格の表れだろう。

と、小夜が狭山を呼び止めてこちらを指差した。ちょっと待て。

「ん? どうした碧海? 何か用か?」

「い、いや……なんでもない！」

「そうか。……ところで碧海、3限の英語の予習してきたか？ち
ょっと分からなかつた所があるんだが、分かるか？」

「あ、ああ。ここは……」

狭山は普段から性格が悪い、振りをしている。

善人は嫌いなのだそうだが、本人は誰よりも面倒見がよいのに気
付いていないのだろうか。私なんかと話をしてくれる人など狭山以
外にはいないというのに。

「……誤解……してしまつぞ……」

「だあ――！ 危ねえええ――！」

「し……死ぬかと思つたわ……」

我がクラスの遅刻魔ふたりも今日は間に合つたようだ。桜乃はい
かにも遅刻しそうな雰囲気を漂わせているにも関わらず実はあまり
していないのだが。

「だからな、アレに意味がないならやめるぞ」

「気合いが足りないのよ！ もつと起こす氣で送りなさい――」

「なんだなんだ？ なんの相談だ？」

「お前には関係ない」

「消えなさい」

「……ひどくない？」

彼女らと狭山は高校に入つてからの付き合いのはずだ。それにも
かかわらずあんなにも気心の知れあつた仲になつてゐるのはその社
交性故だろう。

「……私は正反対だな。

「はい、HRを始めますよ。おや、今日は全員揃つていますね」

「こっちみるな」

やがて担任の先生が教室に現れ、いつもと変わらぬ一日が始まつ
た。

「狭山」

「ん？ どうしたんだ？」

昼休み。私は以前借りた金を返しにきた。

「この前の金だ。助かった、ありがとう」

「……忘れてた」

お前が忘れてどうするのだ。貸した金が返つてこないかも知れないと。
「……不覚だ」

「狭山さん、お体の調子でも悪いんですか？ 顔が赤いですよ？」

「煩い。黙れ。碧海、次からは気をつけろ」「
気をつけなければならぬのはどうちだ。性格に合わない身の振
り方をするからこうなるんだ。

まあ、性格通りに振る舞つて私のようになるよういいのかもしれ
ないが。

「それでは、今日はここまで

「起立、礼

「「ありがとうございましたー」」

6時間目まで授業が終わり、放課後となる。剣道部に行くために
教室を出る。

「碧海、今日は部活か」

「ああ

「そうか。頑張れよ」

「……っ！」

「頑張つてくださいねー」

「……あ、ああ……」

「どうかしてこる。

「これでは日常生活もままならないではないか。
どうかしていろ。」

「……無様だ……」

胴着に着替えたまではいいが、忘れ物をしてしまった。忘れ物を取つてくると部員に告げた時の恥ずかしさは言葉では表現できない。

ガラシー！

「おりょ」

「桜乃か」

教室のドアを開けると先客がいた。恐るく吹奏楽部を少し覗いてこれから帰るのだろう。

「碧海か。胴着姿なんて珍しいな」

「……そうか」

「ま、あれだろ。忘れ物でもしたんだろう」「む……」

言葉に詰まる。

「あら？ 図星？ 碧海なんかでも忘れ物するんだな～」

だからなんだというのだ。

「まあまあ。いいじゃないの。ボケた所の一つや二つないと面白みにかけるつしよ」

別に面白さを求めてるわけではない。

「はいはい。ここにいたのが狭山じゃなくて残念でした」

「なつ……な、何を言つてているのだ！？ 私はそのようなことは……」

「！」

「いや、もういいっす……。んじやな。とつとと忘れ物見つけた方がいいんじやねえの？」

そうだった、私は忘れ物を取りに来たんだった。

忘れ物を回収し部活に戻る。

今日の練習は余り手応えはなかつた。

「只今帰りました」

「お帰りなさい。」
「飯でてるわよ」

夕飯を食べて後は、夜の稽古。父上が直々に稽古をつけてくれる。

「……はあっ！」

「動きにムラがある。まだ感情を制御しきれていないな

「……はいっ！」

「感情を完全に制御出来れば笑いさえも力に変えることができる。

覚えておけ

「はい！」

そこまで出来たら人間業ではないだろう、とも思ったが言わない
ておく。

……そもそも父上が笑うこと事態殆どないのだし。

「お休みなさい」

「はい、お休みなさい」

「うむ」

私は8時頃に床につく。

以前それを狭山に話したら大層驚かれたが、狭山も就寝時間を藤
阪や桜乃に驚かれていたので、おそらく寝る時間というのは聞いた
時に驚かなければならぬのだろう。私もきちんと驚けるようにし
ておかねば。

こうして何もない日が過ぎていく。

この時間は、きっと大切に過ごさなければならない時間なのだろ
う。

そんな気がする。

退魔士様はかく過いせつ（後書き）

といづわけで退魔士様の一日でした。

全然ほのぼのしてないのは気のせいです。

やってられないのも気のせいです。

最近あとがきが適當なのも気のせいです。

作者が風邪を引いているのも気のせいなのでしょう。

といづわけで次回は後輩様の一日をお送りする予定です。
ありがとうございました。

後輩様はかく過いじせつ（前書き）

お待たせいたしました。

やつといじを更新です。

え？ 待っていない？

とこつわなで後輩様の田端をじいつ。

後輩様はかく過いせり

皆さん、こんばんはー！

我らがアイドル、辻満円でーす！

今日は私の日常をほんのちょっとだけ教えちゃいましょー！

朝は意外と早いんです。お弁当を作らなければいけませんから。

「うーむ……ブロッコリーかアスパラか……」

詰める物を迷う時つて結構楽しくないですか？

「おはよー！」

「おはよー！」
「おはよー！」

お父さんが起きてきました。ちなみにお母さんはいません。私が

小さい頃に死んでしまったそうです。

「お父さん、ブロッコリーとアスパラどっちがいい？」

「うーん……お父さんはアスパラかな」

はい決定。アスパラを炒め始める。

「それじゃ、お弁当は冷蔵庫に入ってるから」

「ありがとうね。行つてらっしゃい」

「いってきまーす！」

お弁当を作り終えたら、学校の支度を済ませて出掛けます。

ガタンゴトン。

この音は私の足音なんかではありません。そ、実は私は電車通学なのです。

おかげで毎日若くして人生に疲れたかのような顔をしているやう

リーマンや〇〇の人たちに影響されてしまふのです。さうしましよ。

駅から学校までは歩いてだいたい10分くらいです。もつもつと近くてもいいのですが。

ガララッ！

学校について教室に入ります。まだ生徒はほとんどいません。H.Rの30分も前ですから当然ですけどね。

「」のヒマな時間をどうするかというと勉強に使います。授業を真面目に聞かなくても済むようにです。予習しておけば分からないところだけ聞いて終わりですから。

「おはよー」

ゲルマン民族大移動の軌跡を眺めていると横からのんびりした挨拶が聞こえてきました。

「おはよー、すみれ」

「満月ちゃんえらいよねー。ちゃんと予習してるもん」

「ならすみれもやりなさい。それに目的を考えると多分偉くはない。「分からぬといところがあつたんだけど、お姉ちゃんに訊いても教えてくれないの。満月ちゃん教えてくれる？」

そう言って英語の教科書を出される。まあ藤阪センパイに文系科目を訊くのは間違っている。どうせ訊くならセンパイにしろ。

「」には倒置が起こってるから……

「あ、そつかー！ ありがとー」

「いえいえ、お礼は学食のデザートでいいですよ。

「え、えへ……」

ガラッ！

「よし、セーフか……」

HRまであと3分を切った頃に馬鹿がきました。

「あ、拓斗、今日体育あるけど着替えは？」

「そんな見えすいた嘘に引っ掛かるか。取りに帰らせて遅刻をせぬ
気だろ」

ちつ、前回に課題提出と言つて帰らせたときに学習したか。

「拓斗くん、おはよう」

「お、おひ、おはよう藤阪」

「チキン」

「何言い出すんだお前はああ！？」

煩いチキン。

「拓斗くん、どうしたの？」

「い、いや、なんでもない、なんでもないぞー？」

明らかに狼狽してるじやん。

「おい満月！ 余計なこと言つなー！」

ガツー！

「うん？ 余計なことつてなにかな？」

「ぎやああああー！ 痛い痛いー！ 離せーこのバイオレンス女ー！

！」

額を掴んだ手に力を込める。

「んがああああー？」

よし、制裁終了。

「た、拓斗くん、大丈夫……？」

なんかピクピク動いてるし平氣でしょ。

「そ、それって痙攣じや……？」

「よーし、HRを始めるぞー、席につけー！」

すみれの弱々しい主張は担任教師の声に搔き消されました。

「おし、学食行くか

「うんっ」

「すみれ、ちゃんとデザート買ってねー」

「う、うー……」

お昼になりました。私は自分のお弁当を持って2人の後に続きます。

「よし、ハヤシライスでいいか

「わたしはA定食」

2人とも食券を持つて列に並びます。それにしてもすごい人です。これだけいると知ってる人も……。

「なにぼけつとしてるんだ。邪魔だ邪魔

「ちょっと考え事してただけですよー。センパイこそぼうっとしてると頭からお弁当がぶりますよ

「ぐぬ……それは言うなとあれほど……」

私が列を見ているとセンパイがポンと現れました。思わず幸運です。

「いやあ、あの時はびっくりしましたねー。足をとられて転びそうになつたと思つたら……」

「それ以上言つたら殺すぞ

はいはい。わかりましたよ。

隠している必要はさらさらないのでキッパリと言いましょう。私はセンパイが好きです。無論恋してるってほうの好きです。

少女漫画のヒロインならもう恋をしたというだけでその相手と結ばれるのは決定事項なのですが、どうやら現実はそう甘くはないようで、センパイは意外ともてているようです。

まああの女装がとても似合いそうな中性的な顔立ちとか、本人は悪役ぶりたいのでしょうかその顔に似合わない性格の悪さとか、それにも関わらずそんじょそこらの善人よりお人好しな本性とか、魅

力的な要素は山ほどあるので当然かもしません。なんせ私が好きになつたのですから。好みがおかしいとかそんな文句は受け付けません。

「直樹、なんかあんたの後輩がずっと私を見てるんだけど」「気にするな。そいつの奇行は今に始まつたことじやない」「ひどいですよー」

目下最大のライバルはこの人でしょう。下の2人ではあります、上の人です。私やセンパイを勝手にナルシストにしないでください。「で、なんなのよ？　さつきからずっと見てたみたいだけど」「藤阪センパイって理系科目は学年トップですけど文系科目はからつきしなんですよね？」

「……何か悪い？」

「で、センパイは文系はそこそこいいけど理系はちよつと苦手」

「だからなんだ。文句でもあるのか」

「じゃあ2人を足して2で割つた人ならちょうどいいですよね……」「ぶふつ！」

「あ、あんた何言つてんのよ！？　あんまり変なこと言つな……」「えー、変なことですか？　私はそんな人がいたらつていう話をしただけですけどー」

「そ、そうだけど……」

「阿呆なことばっかり考えてるんじゃない！　練習しろ練習ー！」

なんかもうこの反応見ただけでバレバレです。しかもセンパイも若干反応が見られるあたり要警戒ですね。

「あなたたち、また騒いで。後輩が見てるでしょ」と思つたら部長の登場です。

「これは満月の起こした騒ぎよ」

「またそりやつて人の責任にして。少しは最高学年の意識を持ちな
さい」

「あんたねえ……」

「いやあ、今日はほんとに私が起こしたんですけどねえ。

「い、いや、確かに辻が馬鹿な話をしてからだつたし、それに乗つ
た俺達もどうかと思うしな！」

センパイが仲裁に入ります。なんか部長相手に強く出れない感じ
がしてますね。弱味でも握られているんでしょうか？

「……分かつたわ。狭山くん、貴方がしつかり指導して頂戴」
行つてしましました。

「やあやあ直樹氏！ 今日も相変わらず静流君の言葉が耳に痛いね
！」

「いるのが当然みたいな登場の仕方をするな」

部長が行つてしまつたと思つたら今度は神楽センパイがやつてき
ました。生徒会長つてヒマなんでしょうつか？

「ああこんにちはー！」

「お前は黙れ」

センパイが神楽センパイとお話ししていると時々意味不明な発言
が飛び出します。なんなんでしょうか。

「というわけで、舞さん、あれはどうじうこうじうつ？」

最近入部した舞さんは神楽センパイのお知り合いでいらっしゃ
とあの現象も説明してくれるでしょう。

「……心も体も繋がつているのでしうつ」

「……そ、そうですか……」

「……そ、そうですか……」

部活が終わると再び駅へ。

家へ帰る前にスーパーで買い物をして帰ります。

「ただいまー」

まだお父さんが帰つてくる時間帯ではありますんが、家に入る時には挨拶を。基本です。

「ただいまー」

お父さんが帰つてきました。

「おかえりなさいー」

私の生活はこんな感じです。

他にも色々なことがある時もありますが、それはまたの機会に。
ではではー。

後輩様はかく過いせり（後書き）

とこう訳で作品で初めて主人公への好意を表明しました辻さんです。彼女も頭はいいのですよ。授業聞いてなくても学年で10位以内には入りますし。

次回は部長様のお話の予定です。

部長様はかく過いせつ（前書き）

遅くなつましたが、話題です。
部の話です。

部長様はかく週1」せり

朝。田を覚ます。

「おはよーひーざこます」

「おはよー」

「おはよー」

お父様とお母様のいる食卓について。

「いただきます」

「……静流、まだ部活は続けていいのか」

「ええ。引退すべき時が来るまでは続けさせていただきます」

「……今から勉強しても遅すぎるくらいなんだぞ。いいのか」

「私の人生は私が決めます。お父様は心配なさらないで下さい」

「……静流、大丈夫なの？」

「平気です。ご心配なく」

自分のことくらい自分で決める。それにわざわざ部活を続けていても大丈夫な大学の附属校に入ったのだ。進学できないなんて事は十中八九ありえない。

がらつ。

教室に入る。誰もこちらを見ない。

当然だ。教室という狭い空間の中でも自分の興味のない人間はもはや背景の一部に過ぎない。わざわざ道端にある石ころを気にする人間なんていらない。

「やあおはよう静流君！ 今日も朝から難しい顔をしているね！」

「……それを進んで観察しようという変人も時にはいるけれど。

「神楽くん、用がないなら話しかけないでくれる？ 貴方も雑談を

楽しめるほど暇な人間ではないはずだけれど」

「もちろん！ 私にかかれば雑談という貴重な時間を生徒会長など

「こう面倒な仕事で潰すことなどありえんよ…」

……思考回路が根本的に違う人間は対処に困る。思えば私の周りはそんな人間ばかりだ。

「最近部活はどうかね！？ 僕の見たところでは後輩の諸君もなかなか部活を楽しんでいるようだが！？」

「ええ、知っているわ。部員でもない人間とお喋りをしているわね。

無駄だわ」

「ふむ、目的のない会話ほど人生の潤いとなる時間はないよ…！ 君も少しその辺りを試してみてはどうだい！？」

「冗談を言わないで。そんな無駄なことをしている暇はないの。

「残念だよ…！ それでは失礼する…！」

神楽くんが立ち去ると同時に担任が入ってきた。

「ではHRを始める」

「起立、礼」

毎日同じことの繰り返し。本当に時間が進んでいるのか疑わしくなる時さえある。

だが時間は進んでいる。もう戻れないところまで。

昼は教室でパンを食べる。普段ならそのままゅつくじと食べているところだが、今日は部長会議があるのでパンを持って空き教室へ向かう。

「では、秋の文化祭に向けた各団体の出展予定を来週月曜までにこちらへ提出して下さい」

とうとう文化祭に向けた準備が本格的になってきた。

私にとって最後の演奏会を開く場もある。

文化祭は土日の2日間行われ、吹奏学部は2回演奏をしている。

土日両日で演奏会を開いているのだ。

演奏会場はアリーナのため、招待試合を行うバスケットボール部などとスケジュールがかぶらないように注意する必要がある。

「このよいうな時間帯にしようと思つてているのですが」

「……うん、いいんじゃないでしょうか？ バスケ部の顧問たちとも相談しておきます」

「ありがとうございます」

その日の内に暫定の予定を組み立て顧問に伝える。この中のものは早ければ早いほどいい。

そして放課後。
他の部員達が待たないようにすぐさま音楽室の鍵をもひりて開ける。

「ちわーっす」

「こんにちは」

「おはよー」

「……ええ、おはよー」

下級生達が集まりだした。それぞれ自分の楽器を取り出して練習を始める。私も練習することにした。

「ほら、ここまで来たんだから観念しろ」

「まったく、もう少し粘れると思つたのに……」

練習を始めて10分程経り、他の部員達もあらかたそろつた頃にようやくあの2人がやってきた。

「貴方たち、毎回言つようだけれど少し遅いわよ。少しあは」

「最高学年の自覚を持ちなさい、でしょ？ まったく、毎回毎

回ワンパターンね」

「……それを分かつていながら遅れるのね。反省の色がないのは何を反省すればいいのか理解できていないからかしら」

「反省する必要がないから反省しないのよ。まだ来てない部員だつているでしょ」

下級生に対して示しがつかないとこいつを何度も言つても分から
ないようだ。

「いや、まあ、確かにそつなんだが、せめてあと5分は早く来た方
がいいな」

「……あんたねえ……」

「そうね。5分でもまだ遅いくらいだけれど」

「よし、それじゃあ気をつけるか。ほら藤坂、行くぞ」

「…………」

狭山くんは葵……藤坂さんと違つて多少なりとも反省はしている
ようだ。それでなくては困る。

「ふちよー」

「あら、辻さん、なにかしら」

「舞さんが何やら伝えたいことがあるらしいので行つてあげて下さ
いー」

「……用があるなら自分で来ればいいと想つのだけれど……」
まあ辻さんがわざわざ私を呼びに来たのだからそつしなければな
らない事情もあるのだろう。

市原さんは他の多くの部員とは違い狭山くんのよつに空き教室で
練習している。一緒に練習する人はいないのかしら。少し心配にな
る。

「市原さん、どうしたのかしら?」

「部長、実は折り入つてご相談があるのですが……」

ひどく真剣な顔で切り出される。何の相談だろ。

「桜乃さんの弟さんの事はなんと呼べばいいのでしょうか」

「…………え?」

「普段神楽さんと同じ学年で狭山さんのご友人の方ををして桜乃さ
んとお呼びしているのですが、その桜乃さんの弟さんはなんと呼べ
ばいいのでしょうか」

「それを私に相談してどうしろとこいつのだろ。」

「と、とりあえず、2人が同じ場所にいないときは桜乃さんでいい

のではないかしら？ 2人が一緒にいるときだけお兄さんや弟さんをつければいいと思うわ」

「そうですか。ありがとうございます。参考になりました」

……なんだつたのだろう。

「やあやあ諸君！ 元気にやっているかね！？」

「邪魔するぞ」

「わざわざ断んなくても平気だつて！ お、部長、遊びに来たぜ！」
部員でもない人間が3人まとめて来た。正直邪魔だ。

「用がないのなら帰つて欲しいのだけれど」

「随分邪険に扱われたものだね！… いいじゃいか、君達の素晴らしい演奏を堪能したいのだよ！…」

「それなら演奏会本番に来てくれないかしら」「
「それでは面白くないだろう。本番にいたる努力の過程にこそ誇れるものがある」

「……ならせめて部員としてそこに参加して欲しいわね」

「当事者じや逆に見れないものもあるつてことだ。なあ！？」

「そうだね！…」

「そうだな」

……頭が痛くなつてきた。団結するとここまで扱いづらこ連中だったとは。

「……もういいわ。狭山くんならあっちで練習してるわよ」

「ありがとう！… では僕達はそちらへ行こう！… 後輩諸君、練習頑張つてくれたまえ！…」

「はーい。

「……神楽くんの言つことには随分気持ちよく従うのね」

「それはまあ生徒会長ですからー」

「生徒会長である」とと聞く」とには何か関係があるのかしら。

「なんとなく聞いた方が自分のためにもなる気がしませんかー？」

「そうね。辻さんは少し素直すぎるかもしないけれど」

「やだなー、私は全然素直じやないですよー？」

「あら、意外ね」

「ふつふつふ、私の本性を見くびりますねー」

全くもって裏があるようには見えない。純真そのものだ。

「……このフレーズ、フルートはあまり主張しないようにしてくれ。2回目はホルンを聴かせたい」

「わかつたわ。藤坂さん、ここから次との間は今よりも少し小さくしていいわ」

「はい、わかりました」

指揮者の時の狭山くんは普段とはまた違う凜々しさがある。普段からこの調子ならもう少し後輩にも尊敬されそうなのだが。

「いやーしかしあの狭山はなんかキモイなー」

「自分に惚れている、といつたところか」

「はつはつは！ 水仙にならないよう気をつけねばなー！」

「……うるさいわ！！ いらんこと言つなら帰れ！！」

……普段とのギャップのせいで全く尊敬の対象として見られていないのが残念だ。

「それじゃあ今日はこれで解散。気を付けて帰つてね
はーー。」

「うして今日も一日が過ぎていぐ。」

「ただいま帰りました」

「ああ、お帰り」

「お帰りなさい」

家に帰れば両親とこくつか会話をしてもとは自室で勉強をする。

部活に真剣になるためには努力を怠ってはいけない。

しかし時は過ぎていく。

本当に進んでいるのか疑わしくなるほど変わらないまま。
だが気付けば戻れないところまで変わってしまひはじつきりと。

部長様はかく過りせつ（後書き）

若手アドバイスですね。なんでしょう。

更新の時間が遅かったのはけりとした事情があつたからです。
詳しきは本編をご覧ください。

とまあ本編の宣伝も済ませたところで次回は神様のお話です。

御神様はかく過ひせり（前書き）

どうも、こんにちは。
かなり更新が遅れてしましました。
とりあえずどうぞ。

御神様はかく過いせつ

やあやあ諸君、おはよー! 元氣かね!?

ちなみに僕は元氣だ! やはり朝から元氣がいいと一田が素晴ら
しいものになるね!

「……神楽さん、どうに向かって話してこるのですか?」

「まつまつま、気にすることはなこと舞君! では行こうか!」

「おはよー! やこます神楽さん、朝! まんばもつ出来ていますよ」

「いやはやはいつも申し訳ない! これは今月の食費です!」

舞君の母君、雪絵さんに食費の入った封筒を渡す。

「いえ、お金は構いません。私たちが勝手にやつてこぬ! ですか
ら」

「では僕の食事を豪華にするのにも使ってください!」

「ふふふ、わかりました。ではありがたく使わせて頂きますね」

このやり取りは毎回やっている。お決まりの会話なのだ。

「やあ神楽くん、おはよー!」

「ええ、おはよー! やこます! 今日も早いですね!」

「ああ。舞をよろしく頼むよ。では行つてくる

「はー、頑張つて下さー!」

「行つてらつしゃー!」

「行つてらつしゃー!..」

舞君の父君、豊氏を送り出したあとは3人で朝食をとる。この時
間は中々いこいものだ。豊氏も朝が早い仕事でなければ加わることが
出来るのだが。

「さて、じつひつとまでした! それでは舞君、行こうか!」

「いわせつをまでした。お母さん、行つてきます!」

「はー、こつてらつしゃー! ふたりとも、気をつけたね?」

任せて下さい！ 舞君は僕がしつかりと護衛しましょー！」

「神楽さんの方が事故を起こしやすいんですから、気をつけしてください

わー」

「はつはつは、これはまた厳しいね！」

舞君の言ひ通りだ、気をつかるところよ。

「ではこれで

「そうだね！ また昼休みに会おうー。」

学校について、それぞれの教室へ。僕は3年の教室、舞君は1年の教室へ。

「おはよーー 諸君、元氣かねーー？」

「よお、神楽

「今日も朝から元氣ねー」

クラスメイトが挨拶を返す。もっと元気が良くていいこと思つた
だがね。朝はみな低血圧らしい。

「夜寝るのが遅いからだと思つただがどうだろーー？」

「……高校生にとっては普通の時間よ。貴方が寝るのが早すぎるだ

け

静流君もなかなか機嫌が良くなつた。とにかく一日中一人
な調子だがね。

「おーし、HRを始めるぞーー」

「起立、礼

いやしかし、静流君の号令は生真面目だね。たまには英語で言つてみてはどうかと提案してみよつか。

「さあ、では生徒会を始めよーー。」

「昼休み、生徒会が毎週2回開かれる。議題は様々だ。」

「会長、最近生徒の中に素行の良くない者がいるようですが

ふむ、直樹氏に小夜君がいる以上そういうこともあるだろ？が、やはり良いことではないかも知れないね。無関係の人間に迷惑をかけるのは関心しない。

「よし、彼らには僕が言つておこう。なに、話せばわかってくれるさ！」

公約に掲げた文化祭の賞金は当選した週に実現成功した。あとはゆっくりとやるだけや。

「それでは舞君、今日は僕も吹奏楽部に遊びに行こう！ オカルト研究同好会はまた次だ！」

放課後、待つていた舞君に告げる。

「わかりました。あまり来ていると松崎さんに怒られてしますよ」

なに、心配はない。それもまたいいものだ。

舞君が行った後、オカルト研究同好会の部室へ。ここには舞君も触つてはいけない怪しげな物がいくつがある。もつとも今日を休みにしたのは他の理由があるのだがね。

ピピピピピピ……！

ほらきた。通信機が鳴っている。正直とりたくはないが、取らないと怒られてしまうのさ。

「やあ、僕だ！ 何かな！？」

彼女のことです。

「わかつているとも！ いづれ話はするつもりだ！」

あなた様は自分の立場を……

ああわかったわかった。全く、簡単に上の立場になるものじゃないね。

「やあやあ直樹氏！ 調子はどうだい！？」

「お前が来なければ最高だつたな」

直樹氏の発言は真剣に捉えたら相当辛辣だ。僕はもう慣れたけどね。

「龍一、あんた新しく立ち上げた部があるんじゃないの？」

「それは今のところ僕と舞君だけしか部員がないのだよ！ だから舞君がこちらに来るとなると暇でね！」

「暇人め……」

暇とは素晴らしいものではないかね。暇のない人生は水のない川のようなものだよ。

「あまり多くても周りに迷惑をかける点では似てるかもしないわね……」

「神楽センパーイ、そろそろ部長が来ますよー」

おお満月君、報告[い]苦労。

「じゃあ松崎が来る前に帰れ」

それは寂しいね。是非最後まで舞台で踊りたいものだ。

「……貴方、また来たの」

「よいではないか！ 僕も君達の音楽が聴きたいのさー」

「なら部員として来て欲しいわね」

相変わらずお堅いね。もう少し柔軟な態度をとれれば人気も出ると思うよ。

「いやー、部長も頭堅いですよねー」

静流君が行つてしまつてから満月君が言[い]つ。

「やはり神楽さんは歓迎されていないようですね。日頃の行いのせいでしよう」

「舞君、言葉とは時に凶器となるのだよー。僕にももう少し優しい言葉が欲しいところだね！」

「神楽さんにはこのくらいが丁度かと」

「それは悲しいな。僕とて感情くらいいはあるのだよー」

「仲いいよな……」

「ふふつ、おふたりとも楽しそうです」

君達には敵うまい。小夜君が直樹氏のところへやつて来たのも偶然ではないかもしれないね。

直樹氏、頑張ってくれたまえよ。

「何を見ていいんだ、気持ち悪い」

「はっはっは！ 直樹氏のあまりの凛々しさに見惚れていたのさ…」

「うわ、本格的に気持ち悪いわね……」

「ロリコンでホモですかー、救いないですなー」

「うん満円君？ 何かなロリコンとこうのは…」

「それでは諸君、練習頑張ってくれたまえ！」
「はーい。

そろそろ静流君の目が本格的に怖くなってきたので退散するしよう。

「おや」

校門に向かって歩いていると、胴着姿の女子が剣道場から出でてきた。

「やあ凛君！ 今日もはりきつているようだね！」

「神楽か。吹奏楽部の帰りか？」

「そうだとモー！ あそこはなかなか楽しいねー！ 君もたまには遊びに行つてみてはどうだい！？」

「ば、馬鹿なことを言つな。私は吹奏楽部に何の関係もないし、行く理由もない」

関係とは作り出すものだよ。それに、直樹氏と親しいといつのは理由にならないのかな？

「まあ、君がそう言つのなら無理に勧めはしないさー。ではせひがだ！」

人とは素晴らしい。

笑い、泣き、怒り、喜び、どの瞬間を切り取つても違う世界を見てくれる。

叶うならば、もう少しだけ、
幕が降りる、その瞬間まで。
僕に夢を。

御神様はかく過ひせり（後書き）

タイトルで2日間くらい悩みました。

なんというか、語呂がね……

それだけ悩んでこれかよ！ とか言わないで下さい。

ネーミングセンスの欠如は本編で充分自覚中です……

というわけで神様のお話でしたが、かなり難産でした。

この作品は勢いで書いてるのでボツになること事態ほとんどないのですが、今回なんとテイク3でやつと形になりました。

こちらはほのぼのが売りなのでシリアルはお呼びでないのです。

次回は靈媒様のお話です。

……靈媒ってだけで人を指しますよね？

靈媒様はかく過いせり（前書き）

登場人物の日常を全部書ききつたら今度は過去話とか現実時間の季節モノでも書こうつかと思います。

では、そんな幻想にはまだまだ遠い今回の話をどうぞ。

靈媒様はかく過いせつ

「舞、朝ですよ」

「……はー」

おはよひじやむこます。市原舞です。

眠いです。

しかしこつまでも寝てゐる訳にはこきません。神楽さんを迎えに行かなければなりませんから。

「それじゃあ、神楽さんを迎えに行つてもおかず」

「はい。よろしくね」

制服に着替えると一田家を出で、隣の部屋に行きます。

ガチャリ。

合鍵は神楽さんが「こくへ引っ越してきました時に貰いました。出入り自由です。

「神楽さん、朝」ほんです」

「あー……舞君……こんな夜中になんの用だね……？」

神様と言えど寝ぼけますし、神楽さんと言えど夢現ではトーンショングも低いのです。

「神楽さんを迎えて来ました」

「僕はまだ死なないぞ……」

「では私の方から伺います」

布団を持ち上げて中に入ります。制服に皺がつきたりですが後で直すことにしました。

「うふと……舞君……つて、のわあああああーっ。」

おはよひじやむこます。

「おおおおおおよう舞君！ いやそれではなくて、僕の布団の中でも向をするつもりだったのかねー？」

「ナニを」

「だあああああああー！ それ以上言つてはいけん！！ わあ

行こつか！？」

「残念です。私としてはいつでもいいのですが。

「神楽さん、おはようございます」

神楽さんにお母さんが声をかけます。

「お、おはようございます！ 今日もいい天気ですね！」

「は、はあ……」

「お父さん、おはようございます」

私もお父さんに挨拶を。仕事へ行くのが早いお父さんはもう食べ済みであります。

「おはよう舞。早く食べないと遅刻してしまつむ」

「そうですね。神楽さん、早く食べましょ。

「あ、ああ！ そうだね！」

朝ごはんを食べている間にお父さんが仕事に出かけ、その後私達も学校に出掛けます。

「では舞君！ また会おう！」

学校につくと神楽さんと別れて自分の教室に向かいます。

「さあ、HRを始めましょう。欠席している人は一人、か

先生が教室に入つてきました。私がこの学校に来たときから空いている空席を見つめて溜息をつきます。

「まあいいわ。さ、クラス委員、始めて」

クラス委員の人が号令をかけ、学校の一日が始まりました。

「おや、舞君！ 今日も来たのかね！？ では一緒に昼食でもどううか！」

「はい。『』一緒にさせていただきます」

昼休み、パンを持つて神楽さんの教室へ向かいます。

「しかし舞君、君のクラスに昼食をともにするような友人はいないのかね？」

「はい。田下のところ」

「「つーむ……」

神楽さんはなにやら悩んでいます。私自身はそこまで気にしていません。必要ならばその時に考えましょ「つ。

「なんだお前、また来たのか……」

「はつはつはーー」の神楽龍一、決して自分を抑える「こと」はないからね！」

「威張れることではないな」

「でも、楽しそうです……」

神楽さんと吹奏楽部へ行くと狭山さん達がいました。小夜さんも話しかけられる人が相手だと楽しそうです。

……それでも、狭山さんの顔は犯罪級ですね。できることなら神楽さんと

「おーい、市原、なにぼーっとしてるんだ」

「……いえ、なんでもありません。少し考え方をしていました」

「……そうか。あまり考えに熱中するごぶつかるぞ」

そうですね。

再び神楽さんや三途川さんと話を始める狭山さん。そういうえば狭山さんと三途川さんは同居していましたね。

「……三角関係もいいかもしません」

もちろん狭山さんは総受けで。

「あのー、舞さん、わっさから不穏な独り言が漏れていますよー」

声をかけてきたのは辻さん。これは失礼しました。

「いやー、しかしあれですねー。舞さんも相当アレな思考回路しますねー」

それでもありません。辻さんも狭山さんは受けだと思いませんか？

「まー男の人同士は置いておいても、確かにいじめたくはなりますかねー」

「やはりそうですか」

「……お前ら、さつきから何の話をしているんだ？」

「どうやら話の内容を狭山さんに聞かれてしまったようです。笑つ

ていろいろなのでしょうが怒りで顔がひきつっています。

「いや、センパイっていじられキャラだなーと思いまして」

「總受けにこれほどふさわしい方もいないと思います」

「……言わせておけば……」

大変です。そろそろ狭山さんの自省心が尽きかけてきました。別に怒鳴られても怖くはありませんが。

「貴方たち、いい加減に練習したらどう?」

と、丁度松崎さんが入ってきました。見回つてばかりで自分の練習はしているのでしょうか。

「やあやあ静流君! 今日もお勤めご苦労!」

「別にあなたに誓められるためにやっているわけではないわ。部員の練習の邪魔をするなら帰つて頂戴」

松崎さんとしては真剣なのでしょうが、そんな理由で神楽さんを邪魔呼ばわりするのは正直不愉快です。

「はつはつは! では諸君、練習頑張つてくれたまえ!」

「はーい!」

「まつたく……」

結局神楽さんは帰つてしましました。

「あいつ、行つた?」

「よ、狭山、練習お疲れさまー!」

松崎さんが行つてしまつたのと引き替へに藤阪さんと桜乃さんがやつてきました。

「今日は随分遅かつたじゃないか」

「ジュース買いに行つてたのよ」

藤阪さんと直樹さんは何といつが、お嬢様とそれに逆らえない下僕といった感じがします。

「……それも大いにあります」

「……あら、あんたどうしたのよ?」

「い、いや、なんか悪寒が……」

「おいおい、風邪かー？ 勘弁してくれよーー！」

「馬鹿には移らないから心配ない」

「それもそうね」

「……あんたら、酷くね？」

「ただいま」

「お帰り舞君！ 練習はどうだったかねーー？」
家に帰るとリビングには我が物顔でテレビを見ている神楽さんの姿が。特に変わったことはありませんでした。

「夜ご飯にしましょ。舞、手を洗つてきなさい」

「はー」

ガチャ。

「ただいまー」

「お、父君が帰ってきたようだね！ 豊氏、早くドアだー。」

「まったく、神楽くんには敵わないな」

神楽さんとお父さんとはとても仲良じです。この調子なら将来も安泰でしょう。

「そ、ご飯ですよ」

「いただきまーす！」

靈媒様はかく過りせり（後書き）

「かく語つき」を連載してると、いわいがほとんど更新停止しているような錯覚を覚えるのですが、実際はどうなんでしょうか？

どうも、ガラスの靴です。

残念ながら拓斗くんやすみれちゃんの日常をやつても分量いかないんでしばらくお預けにして、過去話いつたりやおうかと思います。

リクエストあつたし。

なのでどうしても桜乃弟の話が見たい人はメッセージとか感想とか送つて下さい。頑張つて書きます。

あと別にどうでもいい人もメッセージとか感想とか送つて下さい。頑張つて書きます。返信を。

ではでは。

死神様はかく過けり（前書き）

これが2007年最後の更新になると思います。
番外編という立場ではありますが、こちらでも新しい魅力を出して
いけたらなと思っています。

読者の皆様、来年も是非ともよろしくお願いします！

では死神様のお話です。

死神様はかく過いせつ

「黄泉さん、朝ですよ」

「わかつた」

朝、小夜に起しそれで目覚める。とこつても常に半分は意識を覚醒させているが。

「玉藻さん、朝ですよ」

「あどいふん~」

「直樹さん、朝ですよ」

「…………」

「…………」の家の住人は朝に弱い。

「…………！」

やがて7時になり、狭山直樹の目覚ましが鳴り響く。

「…………朝か…………」

「…………うにゅ…………？ もつそんな時間なのか？」

「直樹さん、玉藻さん。朝です。起きて下さい」

文句一つ言わずにこの低血圧ノンビを起こす小夜はまさに理想の妻と言えよう。

「朝いはんできますよ」

「ああ。おはよう死神」

おはよつ。早く食べろ。

「俺はお前と違ってせかせかした朝は嫌いなんだ……」

そのためなら出掛ける1時間前に起きるのか。ある意味では見上げたものだ。

「煩い。そういうお前は準備も早いくせになんでこんな時間から起きてるんだ」

「それはお前達が起きるからに決まっているだらつ。生活時間を合わせるのは共同生活の基本だ」

「なんかお前に正論言わると無性に腹が立つんだが……」

そうかもしけんな。

「では、行つてきます」

「行つてくる」

「きちんと留守番してろよ」

「うむ！ いつてくるがよい！」

朝8時。俺達は玉藻に見送られて家を出る。

「この生活にもすっかり慣れたな」

「なんだ、藪から棒に」

小夜が来て、俺が来て、玉藻が現れ、ここ数週間の出来事とは思えないほど変化が起きているにもかかわらず狭山直樹は見たところ今までの生き方となんら変わりない生活をしていくように思える。

「いろいろありましたね…………」

「最初に会った時は殺してやるつかと思つたな」

正直俺には人を生と死以外で分ける意義が見当たらないが、この

2人の言つ通り最低限の犠牲で守護するよう努力はしている。

「というか、お前に直接守られたことなんてないような気がするんだが……」

「俺が目に付く危険はあらかじめ刈り取つてあるからな」

予防というのはなくなつて始めてその存在に気付く。何かに似ている氣もするな。

そのような会話をしている間にも狭山直樹の周りには俺と小夜に引き寄せられた厄が集まっている。時折それらを消しながら俺達は通学路を進んでいった。

「おはよ！」

「おはよー、狭山くん、三途川くん」

「うつす

教室に入ると同級生達が口々に朝の挨拶を投げかけてくる。まさかこの俺がここまで人間と関わりを持つとは思わなかつた。

「狭山、黄泉。おはよう

「ああ、碧海。おはよう

「おはよひじやいります」

碧海凜がこちらに挨拶をする。この女は退魔士で相当の手練だが、普段の学校生活ではそのようなことを一切表に出さずに生活している。俺が見逃した厄が狭山直樹に降りかかるような時には、例えば不良と呼ばれる生徒が狭山直樹に危害を加えそうな時に代わって護衛をしてくれているため、あながち軽視できない。

「どうした黄泉。私の顔に何かついているのか」「なんでもない」

「ふいー。セーフセーフ」

やがて始業ベル間際に狭山直樹の友人である桜乃響がやつてきた。

「あれ。藤阪の奴まだ来てないのか？」

「ああ。最近ようやくマシになってきたと思つたらまたこれだ」

どうやら狭山直樹は毎朝自分が起きると同時に携帯メールを藤阪葵に送つているらしいが、効果のほどは薄いようだ。

「惜しいわ。あとちょっとで間に合つたのに」

「まずその基準を改めろ」

そして遅刻しても反省の素振りを一切見せない藤阪葵。これで高3まで無事に進級できているのが驚きだ。

「やあやあ直樹氏！ 今日は久しぶりにこの時間帯に来てみたよ！」

「無駄な試みだつたな。市原連れてとつと自分の教室に帰れ」

神は何を考えているのか、人間と共に暮らす最高神など聞いたこ

とがない。人間と共生するのはせいぜい九十九神のよつた下級神だ。

「うん！？ 黄泉君、なにやら難しそうな顔をしているね！？」 あまり若いうちから悩んでいても人生いい事がないよ！…」

俺は既に200年以上存在しているのだが、それもこの神に言わせればまだまだ年端もいかないということだろう。

「おい三途川。オレは吹奏楽部見に行くけど、お前はどうすんだ？」

「いや、帰らせてもらおう」

「そうか。それじゃまた明日な」

「ああ。また明日」

部活には神がよく訪れるため、よっぽどのことがない限り狭山直樹に危険なことは起きないはずだ。それでも第の直撃を受けそうなつたりトラックに轢かれたりしているが、それ位は小夜を憑けている以上諦めてもらおう。微々たる物だ。

遠くから「どこが微々だ」と魂の叫びが聞こえてきた気がするが、気のせいだと割り切つて家へ帰る。

「…………」

家へ向かつて歩いていると、前方に不審な靈魂が見えた。

「死んでから1週間は経過しているようだな……。今ならまだ存在の消滅は免れるか」

そこにいたのは厄に喰らい尽くされそうになつていてる魂。おそらく先週辺りに報道された飛び降り自殺者のものだろう。暫く探していったのだが、ただでさえ自殺者は魂が脆い上に中々見つからなかつたのでもう喰われたと思っていた。

「随分と強固な魂だ。未練の残つた被害者でも1週間経てばこれ以上に消耗しているものだが……」

未練の残つた者だけが幽霊となるわけではないが、この世への執着が強ければ強いほど魂も強なものになるのは確かだ。生への渴

望にせよ、殺人者への恨みにせよ。

「もしかしたら自殺ではないのかかもしれないな……」

死神は魂を確實に冥府へ送り届けるのが本来の仕事だ。執着の強い魂を安全にこの世から切り離すため、魂の情報を読み取る術を持っている。もつとも小夜のように幽靈として舞い戻った者に対するは使えないが。

靈魂の情報を切り拓く。

「…………」

マンションの一室。

訪れた知人。

ベランダ。

植木鉢を振りかざすその男。

「…………なるほどな」

流石に鮮明なイメージは浮かばなかつたが、いくつか断片的な映像は頭に入ってきた。その事件は確かに屋上からの飛び降りと報道されていたはずだ。

「…………その未練、確かに受け取つた」

『…………容疑者は被害者をベランダから突き落としたのち、屋上に被害者の所有物を置いて自殺に見せかけたとされ』

「あ、これ、この前近くであつた飛び降り事件の話じゃないですか？」

？

「そうだな。自殺に見せかけた他殺か。そんなものが成功するのはミステリー小説の中くらいだ」

「みすてりー小説なら絶対に失敗するのではないか？」

「…………ものたとえだ。あまり気にするな」

『…………ベランダの植木鉢からは被害者のものと思われる血痕と容疑者の指紋が残つており、警察では衝動的な犯行として』

「こわいですね……」

「幽靈が怖がつてどうする」

「ゆ、幽靈だつてこわいものほこわいんですねー。」

「そりゃ。で、殺人のプロ。お前としてはどうなんだ」

人を殺し屋のよつに言つた。

「そりだな……」

『 なお、警察ではこの情報を届けた田嶽者の確認を

』

「魂は見ている、と言つたところか」

死神様はかく過いせり（後書き）

次回から「死神探偵ヨリ」が始まります。
嘘です。

半分くらいでネタが尽きたので適当にぶらりぶらりせてたら探偵の真似事始めましたよこの死神。

最後本人は格好いいこと言つたと思つてますが主人公達には訳が分からぬといふ顔をされます。

では本編より一足早く失礼します。
よいお年を。

妖狐様はかく週1せつ（前書き）

下手したら1ヶ月ぶりくらいの更新です。
本編をじらすになつている方には何故1ヶ月もほつたらかしにして
おいたのかなんとなく察しがついてしまいそうですが、なんにして
も申し訳ございませんでした。

では、とある妖狐の冒険をじ覽下れ。

妖狐様はかく過ごせり

「玉藻さん、朝ですよー」

ପ୍ରକାଶନ ବିଭାଗ

小夜の声が聞こえる。

... — —

…… もハコんな時間なのか……」「

「朝に起れ」これは絶対的な眞実である。

偉大なる妖狐、玉藻様の朝はこうして始まるのじや。

בְּרִיאָה וְעַמְּלָה וְעַמְּלָה בְּרִיאָה

「うむ。深皿でよいのか？」

「はい」

「直樹さん、朝ごはんが出来ましたよ」
ばか2人が机について親の帰りをまつ雛鳥のようにぼーっとしているのに対し、わらわだけが小夜の手伝いをしておる。やはり人間や死神には真似できんことなのじやな。

「ああ、頂きます」

はし
登し上かれ

- 1 -

ばかを見ている時の小夜は妙に嬉しそうじや。そんなに面白い顔
こは思えんのじやが。

「玉藻、どうした

「なんでもないぞ

死神も何のために学校とやらに行くのかよくわからんな。

「それでは玉藻さん、いつてきます」

「行つてきます」

「行つてくる」

うむ。行つてくるがよい。

玄関の扉が閉まる。

じつなつたらもうあとはわらわの時間じゃ。居間に戻つてれびをつけた。

『さて、今月起こつた殺人事件ですが、容疑者は新たに証拠隠滅のため部屋の指紋をふき取つていたことを供述しました』
『てれびではいつも似たような事件が起きておる。わらわは人間どもにいつか復讐をするために、今はひたすら人間の文化を学ぶのじや。

適当にちやんねるをいじくる。

『三鷹さん、はい、あーん』

『よせよ、照れるじゃないか』

『ははは、中野さんも三鷹も、随分見せ付けてくれるじゃないか』

『いやだわ四谷さん、そんなこと言つて』

『いやー、羨ましいね』

『お前もそのうち相手が見つかるわ』

『てれびでは男と女が同じ弁当で「ほんを食べていた。ざつやうにういう食べ方が羨ましいものらしい。』

『今度小夜にすすめてみるかの…』

『さりにちやんねるを変える。

『見て下せーこの透き通つただし汁！ 美味しそうですねー

『…………』

次のちやんねるでは近頃話題うしいうびん屋のりぼーとをしていた。
『ほらこの油揚げ！ だし汁が染みこんでいてジューシーな味わい

た。

です！」

「……………！」

『店長の斎藤さん。この油揚げはどのように作っているんですか？』
『はい。北海道産の大豆を使って、秘伝の作り方で手作りをしています』

るんです』

「……………」

『なるほどー。それが美味しさの秘訣なんですね！以上、いま話題のきつねうどんでしたー！』

「……………よし」

ばかの部屋から服を引っ張り出す。

帽子をかぶり、念のため笛も持つていくとしよう。

「……………尻尾が入らんの？……………」

……ま、なんとかなるじやろ。

「待つておれきつねうどん！今わらわがじっくりと味わいにいつてやる！」

ガチャ……。

「……………」

玄関の扉をそっと開け、外に人がいないかどうか確認する。

「でさー、アイツったらそんなこと言つたのよーー！」

「えーー！？ マジーー！？ 超ウケるーー！」

「……………つーー！」

バタン！

急いで扉を閉め、人間が通り過ぎるのを待つ。

人間どもに無用な恐怖を与えるのもどうかと思つのじや。断じてわらわが恐れているわけではない。

「むむ……………」

もう一度、確認。

「……………今度は誰もおらんな」

帽子が変になつていなか確認して、素早く外へ出た。

「……よ、よし。今行くぞきつねうどん」

一步踏み出しきえすれば、あとは簡単じや。そのままひつ 一步踏み出せばよい。

わらわはうどん屋に向けて意気揚々と歩を出した。

「…………どいすりばいこのじや……」

なんとなく歩いていくと、人がたくさんいる場所へ着いた。それは別に構わぬ。問題なのは、

「うどん屋はどこにあるのじや……」

そう、どこにつけばましひうどんを食べらるのかまつたくわからなこのじや。

「うう……」

さつきからじうじうと人間どもに見られている気がする。どこか変だつただろうか。

「ねえキミ、撮影か何か？」

「ん？ なんじやお主は？」

途方に暮れていると、変な男が話しかけてきた。まさか「やつが知つてゐるのか。

「……あ、あつはつは、随分変な話しかだね。キャラ作りかな？」

「…………？」

わっからこの男が何を言つてゐるのかせつぱりわからない。何の話をしているのじや。

「それでね、ボクはその先のお店のスカウトをやつてるんだけど、キミかわいいよね。よかつたらウチで働いてみない？」

「…………いやじや」

「のわらわが働くなどと、冗談もいといこりじや。

「まあまあそんなこと言わずに。ね、やつてみない？」

「は、離せ！」

「ほら、 じんたがい帽子なんか取つちやつて

止める前に、帽子が取られてしまつた。周りの人間どもに、耳が見られる。

みみ?」

ええええええ！？

笛で男を全力で殴りつけ、その場から離れる。目立つてしまつた。このままではわらわが妖狐であることがばれてしまう。

「ハア」
「ハア」

の。 気付けば小さな家の中に逃げ込んでいた。 ばかの家よりも小汚い

「……なんだ？」
客か？」

突然奥からおやじが現れた。ここのおやじのすみかたってたのか。

「？」

椅子の一つに腰掛けると、おやじは家の奥に行つてなにかを始めた。直後、良い香りが漂つてくる。

「…………」の香りは…………！」

「……今朝、俺の馬鹿息子がテレビに出てな。……おつたく得意氣に『秘伝の』なんて言つちまつて。ずいぶん嬉しそうにしゃべってやがったな。ほれ、食え」

田の前に出されたのをやがておのれにならひだつた。

「……食べても良いのか？」

いいつけてんだる。だまつて食え」

油揚げを、
一口。

「……………」ハ、ハサエのジヤ――――――。」

「……そつや良かつた。今度は馬鹿息子の店で食つてやんな。少しは喜ぶだらうよ」

夢中で食べ続け、気が付いたときに止まざ器は空になつていた。

「あ……」「

今まで忘れていた。確かものを食べるの止め『お金』がいるはずじゃ。わらわの手元にこまつたくな。

「……あ、あの……」「

「……なあに、お代は結構。葉っぱ出されたんじやたまらねえからな

「……？」

「……なんだ、ありや迷信だったのか。まあここんとこひとつと帰んな

「え、えーと……」「いやアハハ、わせでした」

「……おひ

「玉藻――――――」

「痛いわ――――――! こきなり何をするんじや――――――?」

「こきなりもなにもあるか――――――。なんで俺の部屋に衣服がこんなに散乱してるんだよ――――」

「そ、それは……」

「あ、まあまあ直樹さん。玉藻さんもきっとわざわざつたわナジや

……」「

「……まつたく……」

怒りっぽいやつめ。かるしつむが足りないからやつなるのじや。

「わつわづ玉藻さん。今口学校の近くにつどん屋さんガオープンしたんですよ

「そりながら?」

「巷で大人気のチーズ店ぢくてな。社長はとあるつどん屋の息子だったが、売り上げの悪に父親の店に愛想を失して家を飛び出

していつたらしい

ふむ。

「そういうや、なんて言つてたつけ。学校前の店の店長がチヨーンの
社長だつけるか。ふざけた会社だ」

「なにがあるのだろうな。秘伝の油揚げ、あれも社長の父親の店の
作り方らしい」

「それで、ていいくあうと？ で、買つてきたんです！ はい！」

「なに！ た、食べていいのか？」

「もちろんです！ いま準備しますからね」

小夜たちが買つてきたきつねうどんの香りは、不思議とあの店の
きつねうどんに似ていた。

妖狐様はかく過いせり（後書き）

お店の油揚げって仕入れてるんでしょうか？

どうも、ガラスの靴です。

死神といい妖狐といい、ただ一日をリポートしてるだけじゃ半分いかないこの退屈軍団。

次回はお嬢様のわりと暇な一日をお送りします。

吸血鬼様はかく過ぐせつ（前書き）

凄くお久し振りです。

でもこちらは毎回こんなノロノロペースだったかもしれませんね。
さて、吸血鬼でお嬢様な方の一日が始まります。

吸血鬼様はかく過いせつ

朝。

田の出と共に、私の意識は田覚める。

「コンコン。

「お嬢様。お起きになられましたか」「ずっと起きてたの」

私の体はちょっと特別。でも私にとってはこれが普通。

「朝食の用意が出来ておりますが、お召し上がりになられますか」

「うん。いま行くの」

なんとはなしに眺めていた窓を離れ、私は高橋さんのあとをついていく。

「」のお屋敷は私が生まれたときから「」にあった。
お母様もお父様もどこか遠くの国へ行ってしまってあんまりない
い。

だから、「」には私しかいない。

「お嬢様、いかがなされましたか

「ううん、なんでもないの」

「」はんを食べている時にボーッとしてしゃいけないの。

私が「」はんを食べている間、高橋さんは立ったままで動いようとしない。

前に、それでは疲れる、と言つてみたら、これが私の仕事ですの
で、と言われた。

仕事は疲れるみたい。

このお屋敷には他の人もいたような気がするんだけど、あんまり
見たことがない。

あるいは高橋さんくらいだ。

「お嬢様。今日はどこかへお出かけになられますか?」

「……ううん。いいの」

ちょっと前までは、何かと外へ遊びに行つた。

私の知らないことが、いっぱいあつたから。

でも、今は大丈夫。

私の知らないことを、いっぱい運んできてくれる人がいるから。

「……左様で」「ぞこますか」

高橋さんが食べ終わつたごはんを下げるとい、私は自分の部屋へ向かう。

「……今日も来ないの」

あの人は、滅多に来ない。

私の知らないお話をたくさんしてくれる人。

お屋敷の門から玄関までを一望できるこの部屋の窓に映るのは、ずつと変わらない景色だけ。

「早く来てほしいの」

どうして来てくれないのでうつ。

私が待つていれば、きっと来てくれる。

きつとそう。

「……お嬢様、昼食のお時間です」

「……まだいいの」

「……かしこまりました」

それからしばらくして、また高橋さんがきた。

今度はお昼ごはんを食べさせられた。

「それではお嬢様、私は買い物へ行つてまいります

「うん。わかつたの」

高橋さんがいなくなる。

私はまた自分の部屋に行く。

「……今日も、来ないの……」

どうして。

私はこんなに待っているのに。

……待っているだけでは、だめなのだろうか。

「……待っているだけじゃ……」

「 キイ。

「……つ

その時、門が、開いた。

私はすぐに玄関に向かう。

ガチャ。

「 よ、久し振り

「 お久しぶり、なの」

来た。

来てくれた。

「まあ厄病神もいるんだけどな」

ナオキがそう言つてちらりと右肩のあたりを見る。

「ここにちは」

私もそこに向かつてお辞儀する。

「今日はな、駅前で高橋さんの車を見つけたんだ」

「 そうなの?」

「それでな、最初は乗つけてもらおうかと思つたんだけど、自分で歩いてきた」

どうして。

乗せてもらえば、待つてるだけでいい。

なにもしなくていいのに。

「なんというか、待つているだけじゃ、何も得られないだろ」

「……

「自分で何かして、初めて良かつたって思えるんじゃないのか」

「 そう、なの?」

「 たぶんな」

「ほら、また、私の知らないこと、一つ。

それなら、私も、歩いてみるの。

「あーもつまた変な」と覚えさせて……」

「あれ？」

「お変わりに、なられました?」

もう日暮れだ。

「で、変なことってなんだ」

「お前が最初に言ったことだ」

不思議な顔をするナオキ。

こいつは本当に天然のバカだ。

「あ、もしかしてネーベルさんの家に歩いてきたって言つたことじ

やないですか?」

「それがどうかしたのか?」

「まつたく……」

アイツはそもそも外出が苦手だ。

一時期はそれを無理して外をうろうろしてたが、ナオキが時々遊びにくるようになつてからはそれも多少落ち着いた。だといつのに。

「またお前は外出を奨励するよつなことを言つし……」

「引きこもりよりマシだろ」

日焼けした吸血鬼なんて死んだ方がマシだ。

「まあいい。それより血を吸わせろ」

「断る」

無駄な抵抗をしてくるが所詮人間、私の力に勝てるはずもなく。

「厄病神……今度は絶対日暮れ前に帰るぞ……」

「あのー、直樹さん、大丈夫ですか?」

私が血を吸つてしまはばくは昼間も吸血鬼の性質が残るが、まあ許せ相棒。

「で、私はいつものようにこれから散歩に出かけるんだが、お前ら

は帰るか？」

「お前……俺が帰つたらまた他人の血を吸うだろ……」

……お前、帰つた方がいいんじゃないのか？」

月の光というものはいい。体の中から力が溢れてくるよつだ。

「満月はもうしばらく先か。待ち遠しいものだ」

「は？ 月見でもするのか？」

そんなものの月の力もよく分かつてない人間のことだ。

「まあ今にわかるさ」

よくわかっていないという顔をしているナオキを背に歩き続ける。すると、前方に若い女の影が見えた。

「ん？」

「あれ、碧海？」

「凛さん、どうしたんでしょうか？」

前にいたのはいつかの退魔士。相変わらず無駄に殺氣を向けてくる。

「お前たちは……。相手は吸血鬼なんだぞ。少しは警戒しろ」

「言つてくれるね。人間ごときが警戒したところで結果は変わらな

いさ」

「うお、すごいな……ネーベルの奴、碧海の半分くらいしか背がな

いみたい ガハッ！」

余計な事を言つ奴は始末しておく。

「さ、狭山！」

「お前……いきなり何を ギヤア！？」

一撃目を入れた時点で標的は沈黙した。

「直樹さん、今のは自業自得では……？」

「そうだな。その通りだ。

「それで、退魔士が何をやつていいんだ？」

「見て分からないのか。なら教えてやろう。お前が一般市民に危害

を加えているらしいのでな、パトロールだ」

おかしいな。血を吸つた人間の記憶は消しているはずだが。

「ちなみに情報提供者は狭山だ」

「…………」

あんなのに相棒はご執心なのか。泣けてくる。

「さて、それなら私は行くとしよう。せいぜいパトロール頑張つてくれ

「…………」

そうそう。小夜とナオキも置いておくから、あとは頼んだぞ。

「……お、おのれ！」

「う、うーん…………？」

「狭山、気が付いたか」

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ…………」

ナオキの意識が回復したようだ。

まあもともとそんなに強く攻撃したわけではないからな。
人間は脆い。少し力加減を間違えるとすぐ壊れてしまう。
そうすると後が面倒に。これだから人間は。

「どこか痛むところはあるか？ なんなら私の家で治療するが」「いや、いいって。そこまでしてもらつほどのことじゃないしな」

「…………」

「直樹さん、本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。それじゃ碧海。早めに切り上げて帰れよ」

「…………ああ。分かつてている」

ここまで上空で霧となつて見ていて思う。

あの退魔士の中でナオキの存在が大きなものとなつてているのは明白だ。

それこそ、一般的な人間ならすぐに気付くくらい。

それでもあの男はまったくそんなことを意識していないようだつた。

「鈍いのか？」

……いや、違う。

人の感情に対してもちらかといえど常人以上の感覚を持っている。それなのに……そう、人の好意を察知する能力だけが異常なほど欠けている。

「……無意識に壁を作っているな」

なんにせよ、ハードルは高いぞ。

頑張れ相棒。

吸血鬼様はかく過ごせり（後書き）

吸血鬼は不老不死、そして眠る必要がありません。

その代わり昼と夜で精神が違うので実質半日は寝てたり。

ちなみに昼と夜とで性格が違う吸血鬼は特別なもので、本来なら昼も夜も人格は変わりません。

さて、これでひとまず過ごせり編は終了です。

これからまずは主人公とヒロインの出会いなんかをやつていきたい
と思っています。

この続きが新しく連載にするかは置いておいて。
ではまたー！

退魔士様はかく出会いつ（前書き）

お久し振りです、ガラスの靴です。
結局これ以上番外編で作品数を増やすのもなんだかなといつ気がしたので、番外編はここで載せていきたいと思っております。
では過去話第1弾、どうぞ。

退魔士様はかく出会えり

それは中学に入つて暫くしてからのことだった。

「お、おい！ 今、1年の男子が3年の先輩数人に囮まれて……！」
「え！？ せ、先生は！？」

「今呼びに行つた！ でも間に合ひつかどうか……！」

どうやら1年が3年に生意気な態度を取つたらしく。いつの世でも權威に逆らう奴はいるようだ。

私は退魔士だ。人に害悪をもたらす存在を断ち切る者。無用なことに使うべき力ではない。

だからその時、その現場に行つたのは、本当に氣まぐれと、そしてほんの少しの偽善からだつた。

「オイ！ 1年の分際でずいぶんナメた態度取つてくれるなあ！？」
「2年やそこら早く生まれただけだろ。今の世の中年功序列は通用しないぞ」

「こん……のクソガキ……！」

「だいたい集団で女子をナンパするなんて脅迫罪に近いことを平氣でやる奴らに礼儀を教えてもらう筋合いはない」

「正義の味方氣取つてられるのも今のうちだぞ……！」

どうやらちょっかいを出されている女生徒を助けに入つてこうなつたらしい。

「誰が正義の味方か。俺はただ通行の邪魔になつてたから無理やり通ろうとしたら偶然持つていた筆箱に入つていた鉛筆がお仲間の脳天を直撃してしまつただけだ」

「なんで昼休みに筆記用具持つてうわづいてるんだよつー？」

「おそらく、いや、たぶん。」

「……ところでさつきから俺たちのことをじつと見てるあの女子もお前らの仲間なのか？」

「あん？」

1年の男子がこちらに気付く。不良たちも一斉に「ひりひりを見る。

5人か。まあ問題はないだろ？

「なんだ嬢ちゃん。見せ物じゃないんだぜ？」

「帰んな帰んな。それともお嬢ちゃんが俺たちの遊びに付き合ってくれるか？」

私を知っている人間ならば素直に退いてくれるだろうが、そもそもいかないらしい。

「その男子は悪氣があつてやつたわけじゃないだろ？ 離してやつたらどうだ」

「そんなん嬢ちゃんに言われて従うけどじゃねえなあ

「そうだな。少なくとも俺は狙つてやつた」

「…………」

なんだというのだろ？ 「この男は。」そのまま男達に殴られるのが目的なのか？

「そこ1年。そうしているのはもしゃ殴られたいからなのか？」

「お前も1年だろ……。残念ながら俺に被虐趣味はない。だから出来る限り言いたいことを言って鬱憤を晴らしている真っ最中だ」「なんとも捻くれた頭をしているらしい。

「で、お話は終わりかな？」

「お嬢ちゃん、あんまり関わると痛い目見るぜ」

「ふう。正直こうなるとは思つてなかつたな……」

「はつはつは！ 軽々しくこうこう現場に踏み込むといつな ガツー？」

詰め寄ってきた男に回し蹴りを喰らわせる。

「……誰でもいいから助けて欲しいと言つてしまつたやられきた後だと思つていたんだが

「んだこの女！？」

「このやうう！ 怪我したつてしらねーぞ！…」

「私が相手になろう。話はそれからだ

「

「おお……まるで映画だな……」

1分後。私の周りには先ほどの不良たちが5人、大の字になつて倒れていた。

「大丈夫か？」

「正直これだけ見るとお前の方が大丈夫かと訊きたい」「手を伸ばすがそれを無視して立ち上がる。随分余裕だな。「こんな頭の悪い連中に舐められたら不愉快だからな。お前にそ

」

ストン。

男子は再びへたりこんだ。何をやつているんだ？

「……笑うなよ」

「出来る限りはな

「……腰が抜けた」

。……。

「……ふつ、クスクス……！」

「わ、笑うなと言つただろうが！」

その男子 狹山直樹と会つたのは、この時が最初だつた。

「くそ……俺は頭の悪い連中なんかに……」

「馬鹿なことを言つていないで大人しく寝ていり

「こ」は保健室。先ほどの男子をベッドまで運び、保険医を呼んだところだ。

「それじゃああとはわたしに任せて、あなたは教室に戻りなさい

「わかりました」

保険医の指示に従つて教室へ戻る。

ザワ……！

私がドアを開けた瞬間、教室の空気が変わった。恐らく私が不良を倒したということが知れ渡っているのだろう。

「…………」

そういうたとこりで今までと何も変わることはない。今まで通り、誰も私に近寄らないだけだ。

「えー、狭山はちょっとした事情でいま保健室にいる。5時間目が終わる頃には戻ってくると思うから、心配しないようにとのことだ」5時間目、入ってきた教師がクラスにそう伝える。あの男子はこのクラスだったのか。それさえも知らなかつた。

ガラツ！

「お、狭山。生きてたのか」「人を勝手に殺すな。別になにもされてない」「でも保健室にいたつて……」「……それはまあ、大事を取つてというやつだね」「なんで自分のことなのに推量形なんだよ……」狭山というらしいその男子は教師の言つていた通り5時間目が終わるとすぐに教室へ戻ってきた。もうすっかり立てるようになつたらしい。

「お、いたいた。なんだかんだでわつきは助かつた。礼を言ひ」「え……？」

ちらりと見ただけですぐに顔を窓の外へ向けた私に、そんな言葉がかかつてきた。

「…………わ、私に言つているのか？」

「他に誰に言えばいいというんだ。影武者でも雇つてたか？」

「い、いや、そつではなく、私は礼を言われるようなことはなにも……」

「ま、お礼つていうのはする方がお礼だと決めればお礼なんだ。気にするな」

なにやらよくわからないことを言つて狭山は自分の席へ戻つていつた。

「お、おい、狭山。よく碧海に話しかけられたな……！？」

「あいつ、なんだかよくわからない暗さがあるじゃん……」

背後から声が聞こえる。本人達は聞こえないように行っているつもりなのだろうが、幸か不幸か私の耳は鍛えられている。全て聞こえてしまうのだ。

「なんだそれは。そんな評判関係あるか。助けてもらつたから礼を言つ。そのどこがおかしいんだ」

「いやまあ、おかしくはないが……」

「だつたら変なことを言つな。あまり変なことばかり言つていると変な人間になるぞ」

「いや、狭山も充分変な人間だからさ……！」

「なに！？ 僕はまともだ！…！」

絶対に違う。

そう突っ込みくなるのを必死にこらえるその気持ちは、初めて起きたものだった。

「大変だ！！ 狹山がまた3年に…！」

「あいつは…？」

「なんか呪われてんのかね…？」

数日後、再び教室に危険な知らせが飛び込んできた。恐らくまた何かやらかしたのだろう。

「お、姉ちゃん。来たな」

「俺たち、お前さんに用があるんだよ」

「この前と同じ場所にいつてみると、この前と同じ不良たちがいた。どうやら用があるのは私の方だったようだ。」

「よかつたな。『嬢ちゃん』から『姉ちゃん』にレベルアップしたぞ」

「なんでお前はそう余裕なのだ……」

そして不良たちに胸倉を掴まれながらも平然としている狭山。な

んとなく3年の神経を逆撫であるのも分かる気がする。

「この前は随分と恥をかかせてくれたじゃねえか。今度は本氣で行くぜ」

「そうか。まだ懲りていなかつたか。では行くぞ」

「せ……戦闘シーンすらねえ……」

意味の分かりかねる台詞をつぶやいた不良はそのまま崩れ落ちた。

「おお、やっぱり強いな」

「……これくらい普通だ」

そう。私にとつてはこれが普通。

周りの人間にとつては脅威に見えるだけだ。

「……よし、決めた」

「何をだ」

「お礼がしたい。今日の放課後ちょっと付き合つてくれ」

狭山はそれだけ言つとさつさと教室へ帰ってしまった。何をした
いというのだろう。

そして、放課後。

「さ、狭山！ 私はこんなところに来た事は

「それは良かつた。お礼としての価値も生きてくる

「わ、私が言いたいのはそういうことではなくだな……！」

狭山に無理やり連れて来られたのは駅前にあるファーストフード
店。こんなところに来たことはないから、どうすればいいのか全く
分からぬ。

「まあまあ、注文は俺がするから、何を食べたいか選んでくれ

「……といつても……」

色々な食べ物の写真が並んでいるが、ビゴがビゴ違つのかすら分
からない。

「……すまない

「いや、何故謝る？」

結局狭山に選んでもらい、狭山の案内に従つて席まで移動する。

「……す、随分と辛いのだな……」

「慣れてない人間にはそう感じるかもな」

これがファーストフードといつものなのか。不思議な味だ。

「少なくとも家ではこのようなものは食べたことはないな」

「……お前の家、ひょっとして金持ち?」

違う、と、思う。

「それにしたつて、お前ってなんか変な奴だな」

「どういう意味だ」

「いや、普通わざわざ不良に絡まれてる人間を助けに来たりしないだろ。いくら強いつて言つたつて」

ただの気まぐれだ。

「……俺は気まぐれで助けられたのか。なんか一気に捨てられたのを拾われた子犬みたいな心境になつてきた」

「……お前も、変だな」

「俺は変じやない！ 普通だ！ 平凡だ！ 鳥合の衆だ！」

「そこまで言わなくとも良いのでは……？」

その後も狭山は面白い話を沢山してくれた。私もそれにつられて笑つた。

「それじゃ、これからよろしくな。碧海」

「ああ。よろしく頼む」

どうやら私という人間にも、親しい友人といつもの出来たらしかつた。

両親に話すと大変喜ばれた。男だと言つた時の父上の顔が少し気になつた。

それは中学に入つて暫くしてからのことだった。

退魔士様はかく出会えり（後書き）

彼らは中学1年の時に知り合いました。

そのまま同じ高校に進み、今の状況にあるわけです。

本当はもっと『人を寄せ付けない感じ』を出したかったんですが

…えらくお人よしな性格に。

ま、いいとしましょう。

とりあえず次回は藤阪、次々回で辻と、時系列にそつて書いていきたいと思います。

では次回をお楽しみにー！

氣分屋様はかく出会えつ（前書き）

「どうも」んにちは。ガラスの靴です。

あの出会いから3年後。

再び主人公にお人好しフラグが。

とこり訳で藤阪さんとの出会い、お楽しみ下さい。

気分屋様はかく出会えり

「いじーね……」

中学3年の2月初め、あたしはとある高校の試験会場へやつてきていた。

この高校を選んだのに深い理由はない。ただ大学への推薦があるエスカレータ式の学校なら多少楽が出来ると思ったからだ。その分競争倍率はだいぶ高いようだけど、人間やってできない事はない。落ちたら落ちたで他の高校へ行けばいいのだ。

「よ、藤阪」

「響、あんたもここ受けるの？」

いつの間にかあたしの隣に響が並んでいた。中学で知り合ってからはよく行動を共にしている。

「そりやあこの町一番の進学校だしな。受けといて損はないだろ」確かにね。あたしも大体同じ理由よ。

「えーと……受付はあそこみたいね。行きましょ」

「おう。……うー、さぶ……」

受付で受験票を見せると、本人確認を済ませた後に受験する教室が書いてある札を渡された。

「お、ここでお別れか」

「そうみたいね。

「それじゃ、お互い頑張ろうぜー！」

あたしが落ちてあんたが受かつたら殺しに行くから。

カツ、カツ。

雪でも降りそな曇り空が窓から覗く廊下にあたしの足音だけが響く。

「……少し早く来すぎたかしら。あたしらしくもない

本来行列とか待機とかそういうのが大嫌いなのだ。このままだと教室で何分も待つ羽目になりそうね。

「……受験票見せた後でも外に出れるのかしら」

ひとまず自分の受けける教室くらい見ておこう。

そう思つて札に書かれているのと同じ教室のドアを開ける。

ガラッ！

「…………」

教室には「コートを着た男が一人座つてゐるだけで、他には誰もいなかつた。

「こりゃあ本格的に早すぎたわね…………」

「…………」

その男は「ちらちらをちらつと一瞥すると再び持つている参考書に田線を戻した。淡白な奴ね。

「今の時間は……げ、まだ1時間以上あるじゃない」

もう駄目だ。どこかで時間を潰そう。おそらく響も今頃暇を持て余しているところだろう。

流石に試験直前の詰め込みをしている人の目の前で電話をするのは躊躇われたので廊下に出て電話することにした。

「試験会場では携帯電話は禁止だぞ」

「は？」

ドアを開けながら携帯を取り出したあたしにその男が注意する。相変わらず田線は参考書に注がれたままだ。

「見つかったら面倒だろ。下手したら受験資格が消えるぞ」

「別にあんたに注意されるいわれはないわよ。見つかつたらその時はその時でなんとかするわ」

「そうかい。なら別に止めはせん

なんだか不愉快な男だ。何というか、雰囲気が。

「あんたこそ、こんな早くから来て、カンニングの準備でもするつもり？」

「そんな馬鹿なことやつてる暇があつたら勉強してる

「あ、そ。それじゃあ頑張って」

「だから廊下で電話をするなと言つて」「元氣に

再び教室を出ようとするとあたしをまたしてもその男が引き止める。

しつこいっての。

「あのね、まだ試験開始まで1時間以上あるのよ？ そんな時に電話しようがなにしようが影響ないと思わない？」

「向こうは思うからそう注意してるんだ。ここで電話してもいいから廊下に出るのはやめろ」

これは意外だ。参考書しか見ていないが、別に本気で最後の抵抗をしているわけではないらしい。

「それじゃ、お言葉に甘えて」
響の携帯に電話を掛ける。

ブルルルルル。

おかげになつた電話番号は、現在電波の届かない場所にあるか、電源が切られています。お掛け直し下さい』

……あの馬鹿。こんなときだけ真面目ぶつて電源を切つていやがる。

「はあ……」

「出なかつたのか」

それ以前の問題よ。もういいわ。さつわと自分の席について一眠りでもしよう。

「……まだ何か用でもあるのか」

「……ここがあたしの席なのよ」

受験票の席番号はなんとそいつのすぐ後ろだった。偶然にしては出来すぎね。

「……そうだ。あんた、のど渴いてない？」

「かなり嫌な予感がするからはつきり言つておくが、一度中に入ったら学校の外には出れんぞ」

「まあまあ。なんとかなるつて。それじゃあ、行きましょつか」

「待て、俺は外に行くなんて一言も言つてない」

ちつ、つまらん男だ。

「しょうがないわね。じゃあ下のテラスでいいわよ。自販機くらいあるでしょ。

「最初からそ」でいいだろ……」

「つべこべ言わない。とつとと行く！」

「だから何で俺までついていかなきゃならんのだ」

と言いつつも諦めたような表情を浮かべて席を立つ。意外と人付き合に良いのね。

「はあー、身も心も温まるわー……」

「100円のバーべーくらいでよくそんなに満足しつな笑みを浮かべられるな……」

何よ、あんたこそ番茶なんて爺婆みたいなもん飲んでるじゃない。「人の嗜好にけちをつけるな。これでも充分温まる」ほれみろ。自分だつて温まつてるじゃない。

「む……」

なんとなく勝った気分になつてその男を見ていると、ポケットに英単語帳が入つているのに気付いた。

「なに? あんたまだそんな悪あがきを続ける気?」

「それは全国の受験生に失礼だろ……。今ここで見た単語が試験に出る可能性だつてあるじゃないか」

そんなもんに賭けるくらいなら鉛筆転がす練習でもしてなさい。

「そっちの方が訳分からん。全く……」

と言いながらもそれを聞く気配がない。あたしがいるからだらつか?

「……よし、じゃああたしが試験に出る単語を予想してあげようじやない」

「……は?」

だから、その単語帳から試験に出そうな単語をペックアップして

やめうと黙つた。

「そんなことしてもいいからいないうつそ最初から全部やつて欲しいんだが」

「「」ちゅあ「」ちゅあ 言わない！ ほら、貸しなさい。」

男の单語帳には一つ一つの单語にチュックと小さくメモがしてあつた。かなり勉強しているようだ。

「英語なんて一言語の分際で優遇されすぎだと思わない？」

「ロシア語を覚えろと言われるよりはマシだと思つがな」ペラペラと单語帳をめぐりながら適当な会話を交わす。むむ、影響の〇〇なんて初めて聞いたぞ。

「よし、それじゃああたしの言つた单語がひとつ試験に出るたびに100円貰うわよー。」

「おこ、それって多く言えば言つぱど」「ちが不利じやないか

「まずは…… p e r s u a d e …」

「……人を説得して～させる」

「それじゃあ、 a v a i l a b l e …」

「利用できる」

「次は

「

キーンゴーンカーンゴーン。

「なんだ、予鈴鳴るんじやない」

「呑氣なこと言つてる場合か！？ あと5分で試験始まるんだぞ！」

「！」

「あんただつて割とのんびり答えてたじやない」

「お前が時間把握してると思つたんだよ！ いいから急げ！」

そのまま单語の問題を出していたらいつの間にか1時間経つていてようで、2人で慌てて教室へ飛び込んだ。

「……おや、間に合つたみたいですね。始まつてしまつては手遅れなんですから、気を付けて下さい」

煩いわね。さつさと問題配りなさいよ。

「それでは問題を配ります。受験者の方は問題冊子の表紙に書かれている注意事項をよく読んで」

「それで、自信はどうよ?」

「まあまあね。受かってれば受かってるでしょ。響、あんたは?」

「オレもそんなどころだ。ほら、見に行こうぜ」

試験の2日後、あたしは合格発表を見るために再びあの高校へ訪れていた。

「えーと、318……318……」

掲示板の周りには落とした飴に群がる蟻のよう�이人が押し寄せていた。動きにくいたらありやしない。

「だあー! また見失っちゃったじゃない! あるのかないのかはつきりしないよ!」

「318ならあつたぞ」

「はい?」

横から不意に声がしたので首をぐるんと回転をせると、そこにはあの男がいた。

「なによ、嘘だつたら承知しないわよ」

「試験にお前の言つた単語が出まくつたせめてものお礼だ。ここぞ嘘を言つても後で電車のホームから突き落とされるだけだしな」それはそうだ。お礼は試験の後にファーストフードを奢らせたので終わつたと思つていたんだけど。

「えーと、あ、ほんとだ。318番あつた」

「お前、少しほ人の言葉も信じろよ……」

あたしは自分の目で見たものしか信じないので。

「そうかい。大した自信だ」

「それで、あんたは受かったの?」

「ああ。お前のおかげかもな」

見ると、確かにあたしの番号の一つ前も同じ掲示板に書いてある。

よかつたじゃない。

「なんか軽いな……。合格者はあつちで入学手続きの書類を受け取るんだぞ」

それじゃあたしの分もよろしく。

「本人以外じゃ無理に決まってるだろ。大人しく自分で行け」

面倒くさいわね。

「おーい！ 藤阪ー！ 受かつてたかー！？」

受かつてたわよ。そんな大声で訊いて落ちてたらどうするつもりだつたんだ。

「お？ そつちの男は？ 中学にそんな奴いたか？」

「ああ、こいつは」

「そういえば、まだ名前も訊いていなかつた。

「あんた、名前なんていうの？」

「今さらだな……。狭山だ」

名字なんて後だつていよいよ。下の名前を聞いてるの。

「…………狭山直樹」

「そりゃあたしは藤阪葵。よろしくね、直樹」

「…………で、その狭山つてのは、なんなんだ？」

「ああ。よろしく！」

「オーライ…………」

じつして、あたしの高校生活の第一歩が始まった。

気分屋様はかく出会えり（後書き）

高校受験の場があんな感じでいいのかよくは分かりませんが、まあいいんじゃないでしょうか。

というわけで藤阪さんとの出合いでした。
桜乃の扱いがおかしいのは気のせいです。

次回は後輩様との出合いです。

後輩様はかく出会いこそ（前書き）

辻さんのお話です。

まあ彼女も最初はこんな性格だったわけです。
え？ 今も変わっていない？

とつあえずじつね。

「ねーねー、いつもお弁当ひとりで食べてるよね?」

「……はい?」

私がある高校に入学してから1ヶ月ほど経った頃、いつものように自家製のスペシャル弁当を食べようとしていると知らない女子生徒が話しかけてきました。ああ、知らないというのは失礼でしたね、同じクラスの女子生徒が話しかけてきました。どちらにしろ今まで話したことはなかったので顔を知っているレベルですが。

「もしよかつたら、一緒にご飯食べない?」

「……なんですか?」

なんなんでしょうこの人は。一人でご飯を吃べるのが寂しいと思つてたら同じく一人でお弁当を開こうとしている私を見つけて同じ一人者同士仲良くしようとか思つたんでしょうか。

「おーい藤阪、何やつてるんだー?」

「あ、拓斗くん、ちょっと待つてー」

ピキッと来ましたね。どうやら私の予想は大きく外れたようです。よそのクラスの男友達がいるのに私に話しかけてきたみたいですねなんなんでしょう、単に一人者を哀れんでいるのでしょうか? だったら大きなお世話です。

「彼氏との楽しいひとときを邪魔するつもりはありません。どうぞ2人で楽しんでください」

「ほえ? 彼氏?」

……完全に意識なしのようです。本当にこの人はなんなんじょう。

「えーとね、なんだかいつもひとりだったから、一緒にご飯食べてみたいなーって思つたんだけど……迷惑だつた?」「迷惑です」

「ええー……」

そんな本気で落ち込まれても困るんですが。

「おい藤阪、お前何やつてるんだよ」

と思つたら痺れを切らした彼氏がやってきました。

「遅かつたですね。早いところ彼女引き取つてくれさー」

「か、かの……！ バ、バカ、違ーよー」

「あれ。私はShieの意味で『彼女』と言つたんですけど。何を一

人で勘違いしてんですか？」

「なつ……！ オ、お前、あんな言い方したらそう取られるだろー！」

「そう取られるつじどう取られるんでしょうか？ 詳しく教えてください」

「ぐ……」

「この女子はよくわかりませんが、いつもこの男子は面白いですね。いじり甲斐があります」

「気が変わりました。」一緒に緒しましちゃう

「え？ ほんと？」

「はい。どこで食べるんですか？」

「えつとねー……」

「やひれた……」

まさかその混雑ぶりが早くも一年の間で評判になつてゐる学食に連れ込まれるとは思いませんでした。どうやらあの2人は前からこうやって昼食をとつてゐるらしいですが、私はずっとお弁当だったのにこんな配給に群がる難民の集団みたいな環境に慣れているはずもありません。あつという間にばぐれました。

「というかテーブルが見えないほど混雑つて何？ 改築した方がいいんじゃないの？」

周りにクラスメイトらしい人はいないので敬語を使う必要はありませんね。文句を言いながらあの2人を探します。

「いない……」

ええ。全然いません。からかわれている気になってしまいます。まさかどこから見て楽しんでいるのではないでしょうか。

その時、私は2人を探すことに気を取られていて重大なミスを犯してしまいました。

「わ……つ！」

そう、いい加減鬱陶しくなってきたこの人混みに足を取られてしまつたのです。

私はその時お弁当を持つていました。

そのお弁当は私の手を離れ、放物線を描いて飛んでいき。

グシャ……！

「…………」

あろうことか途中で包みが解けて空中分解を始め、どつかの誰かの頭に直撃しました。どつかの誰かと言つたのは恐らく男子生徒であろうその人が後ろを向いていて同学年か先輩かわからなかつたらです。

「…………」

さて、どうしましょう。

できることならこのまま何事もなかつたかのようになこの場を離れたいのですが、せめてお弁当箱を回収しなければなりませんし、何より私はまだ転んだままです。

「…………」

その人はゆっくりとこちらを振り向きました。そして人混みの中転がっている私を発見したようです。

「…………お前か、これ

「…………」

「おーい。お前かつて訊いてるんだがー？」

その人は何か言つてはいるようでしたが私にはビールでもいいことでした。

普段は無神教な私ですが、今日ばかりは神様に感謝です。

ぶつちやけて言いますと、ど真ん中ストレートでした。たとえ髪の毛に卵焼きとブロックコーヒーの破片がぶら下がつていようが制服の肩からご飯が零れ落ちていようがど真ん中ストレートです。

「おひこり、いい加減に返事しろ。それわりの不名誉な弁当の残骸を処理したい」

「……お名前をお聞きしてもいいですかー？」

「なんでやねん」

「いやー、すみませーん。人混みに足をとられちやつてー」

「まったくだ。おかげで皿飯が台無しだ」

「うーん、顔つきはタイプなんですが、性格に難ありますかねー。

『そんなこと気にしなくていい、それより君のお皿ご飯を台無しにしちゃつてごめんね』くらいうつて欲しいんですけど。まあ本当にそんなこと言われたら引きますが。

「……何か言いたげな顔だな。言つておくが弁当の中身弁償しろとかだつたらぶつとばすぞ」

「あははー。まあそれは置いといで」

「否定はしないんだな」

「ほんとに大丈夫ですかー？ なんかまだ髪に卵焼きついてますよー

「誰のせいだと思つてるんだ……」

「さあ。誰でしょうね？」

「はあ……ついてこい」

あれ？ なんか歩き始めました。ひょっとしてこのまま校舎裏に連れて行かれてカツアゲでもされちゃうんでしょうか。だったら容赦しないんですけどね。

とりあえず大人しくつじていくとその人は学食に隣接した購買へ歩いていきました。なるほど、代わりのお皿ご飯ですね。

「ちょっと待つてろ」

「そう言つとその人は列に入つていきました。代わりのパン代を出せとかそんな結果が見えてきましたね。だったら大人しく待ついる必要はありません。さつさと退散することにしましょう。待てつつてんだろうが」

「ええー、早ー」

「早くて何が悪い。逃げようとするな」

「うわ、この人こことどばかりにパン5つも買つてますよ。なんてせこいんでしよう。こんな人が将来の日本を背負つていいくのかと思うとぞつとしますね。」

「……なんか失礼なこと考えてないか?」

「いーえまつたくこれっぽっちしか考えてません」

「考へてるじやねーか!」

「よく気付きましたね。」

「もういい……ほら、選べ」

「…………はい?」

「選べっての。お前も昼飯なくなつただろ」

「…………」

「この人は何を言つているのでしょうか。もしかしてそのためにわざわざ5個もパン買つたんでしょうか。」

「じゃーカレーパンを……」

「他にはいいのか」

「じゃー全部ぐださー」

「あんま調子に乗るなよ」

「残念です。」

「ほれ、カレーパンとメロンパンだ。足りなかつたら自分で買え」パンの定番ともいえる商品を私に放り投げるとその人はスタスタとどこかへ行つてしましました。お金払わせるのを忘れたようです。

「…………もしかして」

「もしかして、奢ってくれたんでしょうか。こつちがお弁当ぶらしま

けたのに？

「……面白いですねー」

ただ単に性格が悪いだけではないようです。俄然興味が湧いてきました。

顔も合格。性格も面白いそつ。これで他に何の問題があるでしょうか。

経済力は様子見ですね。ひとまずはつづかり記くのを忘れてしました。名前から調査しましょう。

「それって、狭山先輩じゃないかな？」

「狭山？」

まずは、教室に戻るといつの間にか帰つて来ていた2人に聞いてみることにしました。すると一発で出てきた候補。

「うん。わたしと拓斗くんは1つ上の学年にお姉ちゃんとお兄さんがいるんだけど、狭山先輩はお姉ちゃん達の友達なの」「なるほど、この2人の仲の良さはそういうつながりから来ているんですか。

「何で……僕は殴られたわけ？」

「誘つておいて放置した罪は重いですけどセンパイの情報を教えてくれたので手加減しておきました」

「理不尽すぎるだろそれ！？」

外野は無視です。

「それで、その狭山センパイはどこのクラスにいるんですか？」

「クラス……うーんと、それはよくわからないけど、すぐに会える方法があるよー」

「その方法とは？」

「それはねー」

「 とこ'り訳で、辻満田です！ これからよろしくお願ひしまーす！」

「 ……な……」

おーおー、驚いてる驚いてる。

「 ……なんでお前がここにいるんだ―――！？」

「吹奏楽部に入りたいなーと思つて。同じクラスの藤阪さんが紹介してくれましたー」

「おー藤阪妹ー！ なんどよつによつて二つを勧誘していくんだーーー！」

「えーっと、狭山先輩に会いたいって」

「んなつ…………！」

さて、時間はまだまだたっぷりあります。
それまで。

「 よりしへお願ひしますね！ センパイ 」

後輩様はかく出会いき（後書き）

顔がよかつたからミーハー気分で同じ部活の同じパートに入った辻さん。

そのうち本当に惚れてしまつたのはまた別の話です。

まあ彼女らしくないといいますか、遊び感覚っぽいのが若干不自然かもしだせませんが、そこは作者の技量不足ということで勘弁してください。

ちなみにすみれと拓斗ともこれをきっかけに仲良くなりました。仲良く？

過去編始まりますとか言っておいてこれでネタ切れなんですが、『これが見たい！』とかありますかね……？

とこう訳で次回は未定です。ありがとうございましたー！

靈媒様はかく出会いえり（前書き）

リクエストがあつた舞と神楽の出会いのお話です。ちょっとほのぼの分が足りないかもしだいので、そういうものの期待している方はご注意ください。何も期待していない方は進んでいいと思います。では、どうぞ。

雨。

アスファルトに降り注ぐ水滴が、思わず耳を塞ぎたくなるほどいの音を立てていた。

でも、手は動かなかつた。

やけに、撥ねる水滴が顔にかかつた。

どうして、私は倒れていのだらう。

どうして、車が止まつてゐのだらう。

その時、誰かが私の隣に立つた。

雨音が、途切れた。

……あなたは、だれ？

「…………」

「…………氣がついたようです」

「…………舞！」

「…………よかつた」

目を閉じて、次に目を開けたとき、そこには無機質なアスファルトはなかつた。

「…………ここは…………」

「…………舞！…………よかつた！」

隣を見ると、お母さんが泣きながら私の手をとつていました。

「…………お母さん」

改めて辺りを見回してみると、どうやらそこは病室のようでした。手を取つて安心しきつた顔をしてゐるお母さん。

白衣を着た人と何か話しかけているお父さん。

そして、入り口のところに立つて私を見ている誰か。

「……私は、どうなったんでしょうか？」

「もう大丈夫ですよ。何も気にする事はありません」

目を閉じる前の映像と今の状況を考え合わせれば大体の想像はつきますが、お母さんが話したくないのなら無理に聞く必要もないでしょ。今のところ左腕がなくなっているなんてこともないです。

「……それでは、明日まで検査入院ということで。お話ししたいこともありますし」

「分かりました。雪絵、行こうか」

「はい。舞、それでは私たちはちょっと行ってきますね」

「はい。行つてらっしゃい」

お母さんとお父さんが医者について病室を出ると、部屋には私と入り口傍の男の人だけが残りました。

「……」

「……何か用でしょうか？」

「……」

どういうことでしょう。私が話しかけてもその人は何の反応も示しません。にも関わらずその視線はこちらだけを向いています。改めて服装をよく観察してみると、その人は白いツナギのような上半身と下半身がつながっている服に同じく白いマンツのようなものを持っています。怪しいことこの上ありません。

「……あの、どなたでしょうか」

仕方がないのでベッドを降りてその人の前に立ちました。さつきのお母さんたちの話を聞いている限りでは動けなくてもおかしくないような気がするのですが、痛みすら感じません。

「……もしもし？」

「……ん？ ひょっとしてそれは僕に言っているのかな？」

やつと反応したと思ったらそんなことをいい始めました。自分の1m手前で目を合わせて発言している人が自分以外に語りかけてい

たら恐怖です。

「その通りです。あなたは誰ですか。そして何故こんなところにいるんですか？」

「ふむ、余計な力を移してしまったかな……？」

質問に答えてほしいです。

「まあよからう！ こうして知り合ったのも何かの縁だ！ 君に少し協力してほしいことがある！」

この人はどうやら人の話を聞く習慣がないようです。一方的な話は続きました。

「僕は……そうだね、うん、一種の幽霊やー。」

「そうですか？」

「そしていわゆる不幸を運ぶ悪霊なのだよー。」

「そうですか？」

「そして運良く君が不幸にも車に轢かれてしまったのやー。」

「そうですか？」

「だから、僕は君にとり憑くことにするよー。」

「そうですか？」

「……ふむ、意外と驚かないものなのだけれど、なら次からその手でいこうか」

要するに、可哀想な人のようです。

まあここは病院ですから、そんな人もいるでしょう。
そしてそんな人に対する私の反応はひとつです。

「では、さようなら」

「……君、話を聞いていたかね？」

残念ながら幽霊なら見飽きていていますので。

「……君、靈魂が見えるのかね？」

「はい。多少は」

「それはすごい！ ならば僕のことも分かるだらうー？」

「あなたは普通の人間です。幽霊とは見え方が違います」

幽霊（と思しき人）を見ると、その密度というか、そういうつたも

のがなんとなく薄く、動き方も若干生きている人と違います。

それに対してこの人は完全に私やお母さん、お父さんと同じ動きで、とても幽霊とは思えません。

「……そうか、そこまで違うものなのか……。シー君も同じ手でいけると思つたのに……」

再びブツブツと独り言を唱え始める幽霊の方（自称）。もう帰つていないのでしょうか。

「ならば君！ 改めてお願ひがある！ 僕に協力してくれないかい！？」

何に関してでしょう。どうもこの人は自分のイメージを他人に伝える能力が欠如しているように感じます。

もつとも、それはこの人だけの話ではありませんが。

「ん？ どうかしたのかね？」

「いえ、なんでもありません」

その幽霊の方は暫くの間何かを考え込んでいたが、やがてパツと私の方に向き直り、「」とつ言いました。

「君は神様を信じるかね！？」

「いいえ」

「……」

何かの宗教団体の方でしょうか。そう思つてみると、確かにこの謎な服装もそれらしく見えてきます。

「……じ、実は、僕は神様なのさ！」

「さつき幽霊だとおっしゃつてましたが」

「そ、それはう……え？ なに？ ダメなのかね？」

誰に訊いているのでしょうか。

「……む、しかたあるまい。……とにかく、幽霊と神様の間くらいの存在なのさ！」

「想像できません」

「つ、つまりだね」

「意味が分かりません」

「その……」

「あら舞。立ち上がりつて大丈夫なんですか？」

「大丈夫です。もう傷も塞がつたようすで」

「そうですか……。じゃあ、これからもう一度検査をするそういうので行きましょう？」

「分かりました。ちょっと待つていてください」

お母さんが部屋からいなくなると、私はゆっくりと横を見ました。そこには肩で息をしている神様と幽霊の間の肩（自称）が。

「ど……どうかね……？」あの、母君にも、見え、なかつただろう

……？」

「最初からそうすればよかつたと思うのですが

「僕も、そう、思うよ……」

なんにせよ、この人が人間ではないといつことだけは分かりました。先ほどのお話も多少は信憑性を増したことでしょう。

「それで、結局あなたは私にどうして欲しいのでしょうか？」

「そうだね、まずは君の家で暮らしたい」

「……プロポーズでしようか」

「はっはっは！ そうだとしたら僕も君も困るだろ？！？ ただ寝る場所があればいいのさ！」

「分かりました、自称幽霊と神様の間の方」

「……その名前は少しばかり分かりづらいね……」

名前を聞いていないので当然です。

「私は市原舞といいます」

「ふむ……僕の名前は……」

少しばかり考えた後、その人は誇らしげにこう言いました。

「……そり、神楽龍一さー！」

「と、そうして私と神楽さんは出会いました」

「そりだつたんですかー。不思議な感じがしますね！」

「そりだな。俺達の最初の出会いがぶつとんでもなく見える」

とある部活中。狭山さんに、『私たちはどのように知り合つたのか』と聞かれたので答えてみました。狭山さんは同情の眼差しを向けてきます。気持ちは分かりますが。

「その後で今の狭山さんのような説明を受けていっただす

「……どのくらいまで信じた？」

「いいえ、信じていませんでした」

「なんとー? 僕の言葉は舞君の心には届かなかつたというのかね

!?

「お前、いたのか」

一応最初から私の話を横で聞いていた神楽さんが大袈裟に反応します。

「お前な、よりもよつていきなり事故なんて不幸をもたらすな。

一步間違つたら死んでただろ」

「はつはつは! そうだね! そのくらいの事故だつた!」

「笑い事じやないんだが……」

「最終的に舞さんが無事だつたからよかつたじゃないですか」

今、狭山さんはおそらく私と神楽さんの関係と今の自分たちの関係が同じものだと思つていてるでしょう。

ですが、おそらく私たちと狭山さんの間にはわずかな、そして致命的な違いがあるような気がします。

「……神楽さん」

「ん? どうかしたかね舞君! ?」

「……私たちと狭山さんたちは、一緒にいられるでしょうか」

「……はつはつは! 何を言つてているのかね! ? 当たり前さ!」

私の予感を吹き飛ばすように、神楽さんは豪快に笑いました。

「心配はないよ。君は笑つていられる。絶対にね」

「……そうですか」

「貴方たち、練習しないのならここに来る必要はないんじゃないか
しら」

「い、いや、あれだ、今後の方針について話し合いを……」

「だったら尚のこと神楽くんは話に参加する必要はないわよね?」

「ま、まあ……」

松崎さんに見つかってしどろもどろの言い訳を始める狭山さんと、
それを微笑ましげに見つめる小夜さん。

「……心配はいらない。きっと彼らも、笑つていられる」

「……そうですね」

いつか来るであろう予感を胸の奥に押し込め、私は大人しく練習
を始めるのでした。

靈媒様はかく出会いえり（後書き）

3年前のある梅雨の日。

彼女は「ひつじて出合いました。

なんとなく回想風にしてみたのですが、どうぞどうぞ。

最後の舞と神楽の対話は意味があるよつでないかもしません。 実は本当に意味があるかもしません。

つまるところ深く考えなくてもいいでしょう。

では、次回もテーマが未定ですが、何か読みたい話などあればどうかひとつ教えてください。

全力で実現したいと思います。

ではでは、ちよーなーーー！

死神様はかく出会いえり（前書き）

リクエストのあつた、黄泉と神楽の話です。

が、正直言つてオススメしません。

血が駄目な人は読まずに引き返した方がいいです。

死神様はかく出会いえり

俺の人生で、最初に記憶しているものは、薄暗い家の一室を紅く染める鮮血だった。

「…………」

特に驚きはしなかつた。

むしろ、とても自然なことのように感じられた。

俺は目の前に転がった肉塊を眺め、やがてあることに気付いた。

汚い。

見れば見るほど不潔で、不快な存在だった。

俺は自分の手に握られた刃物とその肉塊を交互に見て、やるべきことを発見した。

ドンドンドン――！

「開けなさい――！　開けなさい――！」

「通報通りだ。凄い異臭だな……」

「やむを得ん。強攻突入を決行する」

ドンッ――！　ツドンッ――！　バタンッ――！

誰かが、介入してきた。

「…………これは…………」

「…………う…………つ――？　おえ…………つ――！」

介入者たちは、何やら俺と肉塊を見較べては騒いでいた。
煩い。

俺が次に見たのは、監獄だった。

「なんて子供だ…………！」

「本棚にあつた医学書の通りに、自分の母親をバラバラにしていた

「うー……」

「どうも、俺の行動は他人にとって理解出来ないものの方がだ。

「おい、あの母親、どうも外国人売春婦だつたらしい
「うづ、てことはこいつの父親なんか分からないうことか」

「母親譲りだな、あの髪は。真っ黒だ」「
「不吉な色だよ……」

「噂によると、相手は貴族らしいぞ」

「じゃあお坊っちゃんじやないか。信じられないな

やらなければならないことはなかつた。
やりたいこともなかつた。

だから、毎日ただひたすら外の人間の話を聞いていた。
母親はやはり不潔な存在だつたようだ。俺が感じた不快感は間違
つていなかつたらしい。

父親は高貴な人間らしい。顔も知らないが、一度会つてみたいも
のだ。

そうして、俺は暫くの時間を過ごした。

「おい、聞いたか。お前的人生も明日で終わりだ」「
「馬鹿、滅多なことを言つた。こんなことが知れたら國中の恥だ」

どうやら俺は明日死ぬらしい。

どうでもよかつたが、今になつてあの家で読んだ医学書が気にな
つた。

その日の夜、俺は初めて牢屋の中を動き回つた。

別に意味はない。

ただ、最後に記憶の大半を埋め尽しているこの空間をもつと知つておきたくなつたからだつた。

チャリ。

そして、その行動は俺の運命を変えた。

「……ナイフ……？」

俺が持つていた物ではなかつた。
もつと細く、鋭い。

「……」
それを眺めていると、不意にあの日の光景が蘇つてきた。
血の、匂い。

「……」
そつと格子に手をかける。

パキン……ッ！

偶然か、必然か、運命か。格子の鍵は少し力を加えただけで外れた。老朽化が原因のようだつた。

「……なっ！？ お前 カハツ！？」

「馬鹿な……！？ や、やめろおー！？」

「…………」
そして、俺は自由になつた。
一振りのナイフだけを手に。

「あらボク、こんな夜中にどうしたの？ よかつたらお姉さんと遊ばない？」

自由になつたと思った矢先、不潔な存在が近寄つてきた。
どうやらコレは一人ではないらしい。

「……んで……う

「……え？ なんて？」

遊んでもらおう。

「 ヒツ……！」

首を切った後は大人しくなった。

だが相変わらず不快な存在だ。

どうすれば不快でなくなるだろう。

俺は医学書に書かれていた通りにその肉塊を切つていった。

俺がその生活を初めてどれだけ経つだろう。

俺は路地裏の一角に追い詰められていた。いや、追い詰められたという表現は正しくないかもしれない。逃げている意識などなかつたのだから。

「おい、本当にこんな子供の仕業なのか？」

「だだだって見ろよ、そのナイフ」

「信じられんな……」

どうもこの人間たちにとっては俺がしていることは許されないものらしかつた。

「なら、俺を殺せばいい」

「……そういうわけにもいかない。最終的に処刑されるにしろ、お前は殺人犯として法廷で裁きを受けなければならないんだ」

俺はそろそろ嫌気が指していた。

どうもあの不潔な存在たちは俺一人の手に負える数ではないらしい。

永久にこんなことを続けるより、もっと効率の良い方法をその時閃いた。

だから、首にナイフをあてることに迷いはなかった。

「……え……！？」

おかしな連中だ。

誰もが動き方を忘れてしまったかのように呆然と立ち尽くしている。

まあいい。これで俺もようやく解放されるのだ。

それでは困るのだよ。

声が、聞こえた。

そして、気が付くと、俺の体は地になかった。

「……何だこれは」

「不思議な体験だろ？？」

目の前には、見たことのない顔立ちの男が浮いていた。俺も人の「」とは言えないが。

「さて、君は数多くの命を奪った。そう、數え切れないほどね」
説教でもするつもりか。

「では問題だよ。人の命とは何かな？」

考えたこともない。所詮有機物の集合体だろう。

「君は砂糖を溶かしたエタノールを命と言うのかね？ 命が命であるというのは何と不思議なことか！」

何が言いたいのか分からぬ。

「さて、そんな君には人というものを知つてもらわねば困る
「人ならもう知つている。中に何が入つているのかも」

「そんなものは人ではない！」

一瞬、空気が震えた。

「世界の創造主として君に命じる。罪を償い、彼女を救え」

世界の創造主とは何のことか、彼女とは一体誰なのか、見当もつかなかつたが、その言葉が出鱈目だと断じる気にはならなかつた。

ただただ、目の前の男の存在感を肌で受け止めるのに精一杯だった。

「まずは名前を訊こうか。君はなんという名前かね？」

「……俺に、名前はない」
「そうだね。君に付けられたのは単なる記号だ。それは名前ではない」

記号。

そう、俺は記号でしか呼ばれない存在だった。

「だが残念ながら僕に君の名前を付けることはできない。君の名前はいつか誰かが付けてくれるだろう。それまでの間は記号で呼ぶことを許して欲しい」

「どちらでも構わない」

「そうかね。……しかし……」

その男は、真剣な顔で俺を見た。

「……しかし、君はまず裁きと罰を受けなければならぬ。話はそれからだ」

法廷、などといふものよりも、この男の裁きといふ言葉の方が遙かに説得力があった。

「構わない。俺が知りたいのは「これから何をすれば良いかだけだ」

「……そうか。では行こうか。ジャック

俺の人生で最後に見たのは、薄暗いロンドンの路地裏を紅く染める鮮血だった。

死神様はかく出会い（後書き）

敢えて何も言いません。が、彼はそういう存在だった、といつひとです。

付け加えますと、19世紀後半に彼は人間としての生涯を終え、やがて死神となります。

その話は続けて書くかもしません。

では、読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1230d/>

厄神様はかく過ごせり

2010年10月8日13時12分発行